

## 久美子先生の部屋は千客万来

中村久美子教諭のいる保健室は、昼休みともなると入れ代わりたち代わり生徒がやってきて、彼女は時々、自分の昼食も済ませられない有様である。身体の不調を訴える子は少なく、ほとんどは中村先生と話したいだけなのだ。

ここ、星饒女子学園での久美子の人気はそれほど高い。通常、女子校における女性教師の人気は、音楽とか美術とか英語などといった専門的な科目を教える教師に集まるもので、久美子のような養護担当という地味な存在が持てはやされるのは異例と言える。

彼女の美貌が秀でているのもその一つの理由かもしれない。

前髪を軽やかに立ち上げた、セミロングの豊かな黒髪に包まれる中高の容貌は色白で、やや濃い目の眉や、鳶色の瞳、スツと形に癖のない鼻、肉感的な紅唇は、それぞれを引き立てあいながら彼女の美しさを醸していた。いつも白衣の前のボタンを止めずにいるので颯爽とした印象を与えているが、そのせいで身体のラインがはっきりとしない恨みは残るけれど、成熟した女らしさはスカ

ートから伸びるムチムチしたふくらはぎと、キュッと締まった脚首から容易に想像がつくだろう。

こんな中村先生だが美人にありがちな冷たさなど微塵もなく、気さくで、親身になって話を聞いてくれるので、生徒には受けているに違いなかった。それでなければ、自由な校風で、優秀な生徒の多い、つまりミーハーではなく、眼の肥えた生徒揃いの星饒学園で長らく『ナンバーワン』を保ち続けていられるわけがない。

「いやはや、中村久美子はいったいいつになったら、良き伴侶を見付け女の幸せを手に入れることができるのでありましょうか——」

久美子にしても、こんな無礼を本人に向って何の屈託もなく言っただけ、星饒学園の奔放活発な生徒たちが好きでならない。二十八歳になった今でも、恋人はあっても結婚に踏み切れないのは、彼女たちに対する愛情以上で、夫という存在に接することが本当に出来るのか、胸のどこかに一抹の不安があるからだ。

「こら、好本（よしもと）ゆみっ、人のことからかかってないで、三年生になる心の準備は出来ているの。生徒会ばかりにかまけていたら、落第するわよ」

そう言って、久美子は保健室の壁にかかってある人体図、おもに男性の股間を覗きこんでいるゆみをたしなめる。星饒学園には制服がなく、ゆみはジーンズを履いていたが、そのクリクリしたお尻はまったく若さそのもの

の張りを持っている。

ゆみはくるりと振り向き、男性自身を長い指で突つき、イタズラっぽくウインクしながら、「大丈夫ですって。好本ゆみは生徒会会長の激務をこなしながら、見事大学受験をクリアするでありますよう」

久美子は苦笑し、やれやれと手を振った。好本ゆみならばそれも簡単な話だろう。学力は常に学年のトップ級だし、行動力もあり、皆から好かれる性格をしている。久美子が教師の『ナンバーワン』なら、ゆみは生徒の『ナンバーワン』なのだ。手足がすらりと伸びた、新人類タイプの体型で、長い黒髪をポニーテールにしている彼女の貌は小さく、うっすらスキー焼けした美貌はもうじき十歳を迎えるとは思えない早熟した色気すら感じられる。白いTシャツをラフに着こなしているため、胸のボリューム感はわからないが、十歳年上の久美子がかっかりくるほど彼女のそこが豊満である事実は、身体検査のうちにわかっている。（あの母親にしてこの娘あり、か……）久美子はゆみの母親の姿を思い出す。彼女の母、好本早苗は有名な美人市会議員である。特定の政党に属さない、言わゆる市民派の議員で、『腐敗した市政に新風を』のキャッチフレーズで去年、ブームを巻きおこし、トップ当選したマドンナだ。この星饒女子学園のPTA副会長でもある。その美貌目当てに写真週刊誌が取材に来たこともあるし、最近では地元のテレビ番組

のコメンテーターとしてブラウン管を賑わしたりもしている。女傑と言ってもいい活躍を見せる早苗だが、ゆみとは違い、どちらかといえば日本風の、和服の似合う熟女である。ゆみが母親の前向きな生き方に影響されているのは疑いを入れない。ただちょっと奔放すぎるところが玉に瑕だが……。

「いやァ、こんなオ×××ンがぶら下っていると思うと、男性に対する見方も変わらずにはおれませんかァ、ハッハッハ——」

ゆみがオジサン言葉で言うと、さすがの中村先生も呆れ貌だ。

「あなたねえ、真っ昼間からどういうつもり？ それよりもうお昼済ませたの？」

「もちろん。とっくの間に早や弁完了いたしました！」

「まったく……あなたが済ませても、私はまだなのよ。もうお腹ペコペコ。さ、用がないなら帰った、帰った——」

久美子が猫でも追っ払うような仕草をすると、それまで脳天気を決めこんでいたゆみが真顔になり、声をひそめた。

「それが先生、またあの銀蠅……いや、権藤先生が体罰を——」

「……」

またか——中村久美子先生の表情がさっと翳っていった。

権藤は最近奉職した四十代半ばの体育教師で、星饒学園唯一の癌と呼ばれる暴力教師だ。職員会議ではいつも校則の強化を唱え、久美子らの進歩派と対立している。生徒指導の立場でもなくせに、剣道の竹刀をぶらぶら下げて校内を巡回し、生徒たちのアラを探しては管理教育の真似事をするのである。

『お前らは甘やかされてんのだ』と言うのが権藤の口癖であった。『他のまともな学校だったら停学だぞ。たしかに今、この星饒には罰する校則はない。が、しかし俺はお前たちが他の学校の生徒たちと同じように、卒業しても社会で困らない程度のエチケットをだ、今のうちにお前らに教えておきたいわけだ。だからこれは世間の掟だ。何事も国内法より国際法が優先されるように、狭い学校の方針よりも広い社会のニーズを叩きこむ義務が、俺ら教師にはあるわけだ。わかるな、アーン？

——』

こんなわけのわからない理屈をこねながら、やおら竹刀を振り回し、乙女たちの愛らしい臀部に一撃を加えたりするのである。もちろん生徒の自主性を重んじる星饒の教育方針とは真っ向から対立する行為であり、職員会議でも取り上げられ、その都度嚴重注意が申し渡される。しかし何せ確信犯であるし、誰の眼にも触れない場

所を選び痕跡が残らないように打つので、シラを切り通されれば重い処分を科すわけにもいかない。生徒たちは彼を銀蠅と渾名して軽蔑し、また恐れているわけだ。

「——今度は一年生の子で、登校時間が三十秒遅れたとかなんとか難癖つけられて、お尻をバシッ。そのどさくさに紛れてスカートまでまくられそうになったって言うんです」

ゆみの報告に中村先生はぽってりと色っぽい唇を噛みしめる。

「先生、これは恐怖政治でしょう？ 生徒会としては緊急生徒総会を開いて、断固、権藤先生を糾弾しようという話になったんです。もう泣き寝入りなんて御免ですからね」

「待ってよ、好本さん」久美子はゆみの剣幕に驚いて言った。

「あまり軽率な行動をしてはいけないわ」

「どうしてですか」

「権藤先生の暴力を裏付けるちゃんとした証拠はあるの？」

「……」無念そうに美貌を歪めるゆみ。やはり今回も物的証拠はなにもない。

「それではかえって彼の思う壺だわ」

権藤はたぶん、体罰で生徒たちを扇動し、騒ぎが大きくなるのを待っているのだ。無論証拠もなく糾弾集会で

も開こうものなら、それとばかりに、こんな軽拳妄動に走る浅薄な生徒たちに、広範な自治権を与えておくのは無理であり危険だ、などと反撃してくるのは火を見るより明らかであろう。彼の狙いはそこにあるに違いない。

久美子はゆみを刺激しないように慎重に言葉を選びながら、そんな趣旨のことを言って落ち着かせた。

「もう少し先生たちに時間を頂戴」

久美子の真剣な眼差しに、ゆみは大きな溜息をつくのである。

「あーあ、なぜあんな男が星饒の教師になったんだろう」

ゆみの言葉に、中村先生は同僚教師としての責任を感じつつ、暗い予感が広がっていくのを止められない。

なぜあんな教師が採用されたのか——近頃の星饒学園を巡るキナ臭い噂が解答になるのかもしれない。それは私立の学校や医療法人の乗っ取りで有名な忠金屋グループがドス黒い触手をこの学舎に伸ばしているという噂である。学園の経営状態がこのところ逼迫しているらしい情報とも重なりながら、教師や関係者の間で公然と囁かれている話だ。政財界の黒幕といわれる雁金誠一に率いられた忠金屋グループ——手段を選ばぬ悪辣な手口がつとに評判だが、今まで司直の網にかかった過去はなく、雁金の黒い実力のほどが忍ばれている。狙った学校や病院にまず息のかかった者を送りこみ、情勢を内偵させ、

乗っ取り後、バージする人間を見極めるのが常套手段であるが、その内通者が権藤ではないかというのだ。もしそうであれば教師の採用権を握っている学園の理事会がすでに忠金屋色に染まっていることになり、経営者交替も間近とする観測も成り立つ。最近では教職員の間でも妙に腰の落ち着かない者が多くなり、まだ少数だが権藤の主張に柔軟な発言をする先生まで現われたりしているのは、そういった黒い噂に怯えているからなのだろう。

職員室がこのていたらくだから、ゆみに心から大船に乗ったつもりでいる、と胸を叩けないのが久美子には情けなかったが、子供に不安感を与えるのは教師失格とばかり、この件は伏せ、精一杯の笑顔で生徒会会長に実力行使を思い止まらせるのであった。

「あーあ」とまたゆみが溜息をつく。いつも生徒の側に立ってくれる中村先生が賛意を示してくれなかったので意気消沈してしまったらしい。

(ママに相談してみようかしら) 細面の貌をふくらますように慔然として、ゆみはこの頃忙しく、じっくり話す機会のない、母親を思い出した。彼女は市議会の文教委員会に所属し、この学園のPTA役員でもあるのだから、頼めば力を貸してくれるだろう。でも本当はそれは癢に触るのだ。何ととっても、自分のことは自分するのが好本家の家訓なのだから。

「それじゃ、先生を信じてもう少し考えてみます。も



ちろん他の生徒会の皆が納得してくればですけど」ゆみは憂鬱そうに立ち上がった。

もちろんカリスマ的な好本ゆみ会長の意見が通らないわけがない。久美子はとりあえず安堵して彼女を午後の授業へ送り出した。

（それにしても権藤先生か……）弁当箱を取り出し、箸でつつきながら権藤の容姿を思い浮べれば、遅い昼食がなおさら滞ってしまう。あの妙に脂ぎった顔は胃の運動に良いわけがなかった。

と、保健室の扉をノックする音が聞こえた。曇りガラスに映る影は男のものだ。

「ど、どうぞ、入っ……」口の中のソーセージを飲みこみながら入室を促したが、それも言い終らぬうちに扉が乱暴に開けられ、ズカズカと入ってきた男——まさに銀蠅、権藤先生その人であった。

「久美子先生、なんですか、まだお食事中でしたか。とっくに昼休みは終わってますぞ」

権藤は三白眼を光らせ、表情のない瞳でジロリと久美子を見下ろした。いつも紺色のジャージ姿の彼は、がっしりとした体格ながら背は低く、昨今体位向上の目覚ましい女子校生の中に入れば埋没しかねない。角刈りの頭、太くて短い手足、何よりも異様にテカリ輝いている肌の色艶が滑稽な渾名の由来の一つにもなっているのだった。

「模範となるべき教師がそんなことだから、生徒の態度がルーズになっていくんでしょう。久美子先生は美人で生徒たちにもたいそう影響力があるんだから、そのへん自覚してもらわねば」

若い女性をみるとすぐに説教したがる、どこの職場にも存在する中年男。久美子は今だかつて権藤から『中村先生』と呼ばれたためしがない。いつも『久美子先生』と名前なのだ。生徒たちだってそうは呼ばないし、親しい同僚ですら少なくとも学校内では姓を使用する。まして付き合いの短い権藤に馴々しく呼ばれる筋合いはないのだ。一度、やんわりと注意してみたが、あっさり黙殺された。まるで女は半人前なのだから当然だ、と言わんばかりに。

意外な時間に急襲され、機先を制せられた久美子だが負けてはいられない。反撃に出た。

「あら、権藤先生、お身体の具合でもお悪いんですか。血圧でも計りましょうか」

しかしジョークが通じる相手ではない。権藤はどこ吹く風と受け流し、部屋の中を無遠慮に歩き回る。手に持った竹刀の先でコツコツとフロアに突きながら、何かを探っているようでもある。

「どうかなさいましたか」

久美子の質問にも答えず、やおら仮眠ベッドを仕切っているカーテンを開いた。

「権藤先生っ」自分の職場を土足で踏み荒らされたように久美子はキツとなって詰問する。「そこは具合の悪い生徒を寝かしておくところですわ。乱暴な真似をされて、もし生徒がいたらどうするんですっ」

久美子の抗議に権藤はフンと鼻で笑い、カーテンを閉める。

「まあ、そうヒステリーを起こさないでください。まだそれほどの歳ではないでしょう。おっと、ヒスは女性の専売特許、年齢には関係ないか」

幼稚な挑発だがさすがにムツとくる。が、それに乗ってキィキィ言うほど久美子は感情的な女ではない。

「女性に対する権藤先生のご主義は承っておきますわ。それよりご用件はなんですか」

久美子の理知的な態度に拍子抜けの表情をした権藤だったが、この美人教師の鼻の頭に気色ばんでいる証拠の生汗を見付け、ニツと嗤った。

「いやなにねえ、この保健室が生徒たちのサボタージュの温床になっていると、聞き捨てならない噂を小耳に挟んだもんですから、ちょっと巡察に来たわけで」

そうした噂などあるわけがなく、どうせ権藤の捏造にすぎまい。

「それで、根も葉もない噂と、おわかりになりましたか？」

「さあ、それはどうか——」と、権藤は急に竹刀の素

振りを始めながら続けた。

「さっきここから生徒会長の好本ゆみが駆け出して行ったでしょう」

「ええ、来ていましたわ。いけませんか」

「何をしにきていたんです？」

「何って……」

「生理ですかな？」

まるで警察官のような疑り深い眼をして尋ねてくる。

「違いますっ」

「じゃあ、何だというのです」

「生徒のプライバシーに関わることですから詳しくは申し上げられません」

「フン、プライバシーね。久美子先生はお若いので致し方ないが、少し子供というものを甘やかしすぎておるようだ。あいつは母親があんなだからいい気になっているんですよ。遅刻の常習犯だし、私の顔を見ても挨拶一つしようとしなない。あんなチャランポランな奴が生徒会の会長などとノサバっているから、この学校は一向に正常化せんのです」

自分がからかわれるのなら我慢も出来るが、生徒への中傷は赦せない。久美子は好本ゆみがいかに優秀な生徒であるか、こんこんと説きはじめた。成績はトップだがガリ勉ではなく体育や美術、音楽にも関心を持っているし、たしかに不真面目な対応をするときもあるが、それ

は今の若者にはありがちな、一種の照れであって、社会の不正義を憎む気持ちは人一倍強い生徒だ。だからこそ生徒会の役員選挙でも圧倒的な支持を受けたのだし、星饒の生徒たちの眼もまたたしかだったのだろう。なお、母親の威光をカサにきて云々は、当たらない。なぜなら彼女は自立心が旺盛で、こちらから母親の話を持ち出すと露骨に不愉快な貌をするくらいである。内心、慕っているには違いないが、若者らしい潔癖さが彼女にはあって、親を頼りにする甘えを極度に嫌悪しているらしい。▲▲に務める教員であれば、そのくらいの間人心理は見抜けるはずだから、権藤先生におかれましても、重々理解できているとは思っているが――。

などと、久美子は皮肉たっぷりに頬笑んでやった。美しい白い歯並びが覗け、桃色の舌が蠢いているのがチラと見えた。二十代の女性教師に理路整然と反撃され、権藤は素振りをやめて、憮然としている。さらにまずいのは、中村先生が白衣の裾を翻しながら、立ち上がったことだ。久美子はすらりとした長身の持ち主で、権藤よりも頭一つ大きいのである。カッと燃え立つような美女に見下ろされるのは、この種の中年男には耐えがたい苦痛らしい。彼は急にそわそわしだし、退散しようとする。

「と、とにかくですな。保健室に何の理由もなく生徒が入り浸るのは、まともな状況とは言えないわけです。緊急の事件に常日頃から準備を怠れない養護教諭である

あなたが、所定の時間内に食事も済ますことが出来ないのであれば、やはり由々しき事態であると言わざるをえないわけで」 そう言いながらも権藤の足は扉に向っている。

「火のないところに煙は立たず、ま、そこんところを充分考えて戴ければ、よろしいのです。では次の授業の準備があるものですから、このへんで、おいとまを——」

扉のノブに手を掛ける権藤。その背中に久美子のりんとした声が響き渡った。

「お待ちください」

ぎくりと足が止まった。

「なんですか？」

「権藤先生が何の証拠もない噂話で、わざわざご忠告に来てくださったのですから、手ぶらでお帰しするのは失礼と存じますわ。私も先生に対する聞き捨てならない風評を耳にしたものですから、ご忠告さしあげましょう」

ニッコリ笑う久美子。立ち上げられた前髪が静かに揺れ、あらわな額が理知的に輝いているようで眩しい。

「それは、職員会議であれほど注意を受けた権藤先生が、またまた生徒に体罰を見舞ったという噂です。それもどさくさに紛れてスカートめくりの破廉恥行為にまで及ぼうとしたと、尾ヒレまでついたものです。火のな

いところに煙は立たず、そんな諺を信仰していらっしゃる権藤先生に、お報せしないのもどうかと思ひまして——」

権藤はうっと唸って中村先生の色白の美貌を睨みつける。

「なるほど。好本ゆみですな、馬鹿話を持ちこんできたのは」

「違いますわ。ただの噂でしてよ。動揺したところをみると、まだご存じなかった？」

「フン、まあいいでしょう。たしかに私には前科がありますからな。お疑いになるのも無理はない。しかしこれだけは言っておきますよ。私が以前、学校から叱責を受けた事実行為は、あれは決して体罰などではない。愛の鞭ですらない。そうした大袈裟なものではなく、単なる教師と生徒のスキンシップ程度のものでしたのですな」

「十歳歳の娘のお尻を竹刀で叩くのがスキンシップですか？」

「女性にとって尻が一番、皮下脂肪が厚く、苦痛を伴わないからです。久美子先生だってそうでしょう。もっとも先生くらいになると面の皮ということもありえますかな」

そう笑いながら権藤は竹刀を久美子の貌へ向ける。

「普通の▲▲では日常茶飯事です。あの程度」

久美子は恫喝するような竹刀を邪険に払い除け、

「普通の▲▲だって異常なことだと思います。第一、この星饒の方針にそぐわない」

「その通り。学校の方針に逆らう私が悪いのです。もちろん、今は、ね。」

ニタニタ思わせ振りに笑う権藤。

「今は……どういう意味ですか、それは」

「学校の方針といえども未来永劫変わりなし、ではないということですよ」

————◆。

二人の間に不気味な沈黙が流れた。

「私が今、自分の主張を押さえて、学校の生っちょろい方針に従っているように、もしあなたの意にそぐわない方針変換が学園の上層部にあったとしても、久美子先生、あなたもその尖った角を収めてちゃんと従わねばなりませんぞ。いいですな」

権藤は竹刀を小脇に抱え、踵を返した。そして扉を開け、一步踏みだしたところで、ふと何かを思い出したように振り返った。

「そうそう、うちの女理事長、入院したそうですね」

えっと久美子は驚いた。それは初耳である。

「どうも、こっち——」と、権藤は人差し指を自分のこめかみのところでグルグル回し、「イカしたみたいですよ。経営不振で心労が重なったのでしょうか。ノイロー



ぜだというんですが、いやはやこんな大事な時にトップがそんなんで、我が星饒女子学園はどうなるんですかねえ。転職先でも当たっていたほうがいいのかも知れない。久美子先生のような美人なら勤め口も一杯あるのでしょうかね」

権藤先生の哄笑は扉が閉められてもしばらく聴こえていた。

学校法人星饒学園の理事長、安藤真知は、この学園の創設者である安藤一族の長女として、数年前に現職に就任以来、学園改革に大ナタを振るってきた才女であった。今年、四十四歳になる、この世界では若手に属する経営者で、就任当時はまだ三十代だった。『若輩のしかも女に何が出来る』などといった陰口は、たぶん彼女の美貌に対するやっかみが半分、混じっていたが、真知の眼を見張る活躍ぶりの前にいつのまにか霧散していったのは言うまでもない。

中村久美子も彼女の先進的で自由な教育方針にほだされ、公立校から転身してきたのだ。それだけに安藤理事長への思いは深いものがある。

(彼女がノイローゼ？ まさか、信じられない……)

久美子は、つい二三週間前、この保健室にいきなりやってきて談笑していった真知を思い出した。向日葵の大輪の花のような容貌はますます磨きがかかり、厚い胸と腰のグラマラスなボディを真紅のスーツに包んで、快活

に話していた彼女。若い頃はヨーロッパで暮らし、異国の男性と夫婦の生活をしていたこともあるという。不運にも相手と死別し、傷心のうちに帰国して、家業を継いだわけだが、あの美しさならば多くの誘惑もあつただろう。その辺になると久美子の預かり知らぬところだが、少なくとも表面上真知には暗い過去を背負った女にみられる翳りなどは感じない。旺盛な生命力と活動量で学園を切り盛りしている究極のキャリアウーマンである。但しこれだけの法人組織、いくら彼女一人が獅子奮迅の活躍を見せたとしても、思い通りに運ぶばかりではないだろう。現に急激に改革を進めてきたため、前倒ししていた設備投資や諸々の経費返済の期日が迫り、金策に奔走している毎日とも聞いている。手っ取り早く授業料を値上げすればいいのだが、それは最後の手段と、頑固に理事会の意向を突っぱねているらしい。そんなこんなでストレスも溜まらぬはずはないのだが、あの安藤真知がそのくらいでおかしくなるとは到底久美子には考えられなかった。ここで会った時も肌の色艶も良く、自分より十六歳も年上の女性とは信じられなかったくらいである。それがたった半月程度で、入院しなければならないほどの心労が蓄積する、などといったことがあるのだろうか……。

中村先生は立ち上がり、雪白の頬にかかった髪を掻き上げながら、窓を開けた。二階の保健室からはグラウンド

が見下ろせる。体育着に着替えた生徒たちが、ある者は幅跳びに、ある者は投擲に、またある者は50m走に取り組んでいる。学年末を迎え、日毎春めいてくる周囲の並木には薄緑色の芽がふきはじめ、グラウンドの盛り土の斜面にはふきのとうが顔を出している。彼女のウエーブがかかった黒髪をたなびかせる春風にはすでに冷たさはなく、柔かな陽光が溶けこみ、心地よい。平和な情景の中、誰に指示されるまでもなく自主的に授業をすすめている生徒たちの明るい笑顔が久美子には一番、胸を暖めてくれる。こうした星饒女子学園の良き伝統が、どうしたら継続され続けるのか、中村久美子教諭はもう一度考えてみようと思うのだった。

## 禁治産者製造工場

雁金誠一の乗ったベンツが渥美脳神経科病院の車寄せに止まった。

深夜二時三十分——郊外の丘陵に建てられた病院はひっそりと静まり返っているが、彼を出迎えた白衣姿の面々はそうそうたるメンバーである。院長の渥美宗雄、神経科部長である広瀬 徹、第二病棟婦長、佐々木加奈江、それになぜか安藤一平の姿まであった。彼だけは私服である。ベンツから最初に下りてきたのは運転手兼ボ

ディガードの到来啓太。二メートル近い巨漢を現し、後部座席のドアを開ける。雁金の腹心として誰もが一目置く佐伯弁護士に続いて、主賓が下りてきた。

「これは雁金先生、ご足労でした」

渥美院長以下、病院側のスタッフが一斉に最敬礼する。渥美脳神経科病院は去年、忠金屋グループの傘下に入ったばかりなのだ。それまでいた院長を追い出し、神経科部長であった渥美が院長の座を奪取できたのも、すべて雁金の力のおかげに違いない。

和服姿でステッキを片手についた雁金誠一は150センチを切るほどの低身長なので、背後の到来が山のようにそびえている。とくに出迎えをねぎらう言葉をかけるでもなく、挨拶すら発しない彼の態度はいつものことなので驚くには当たらない。関東一円の政財界の暗部に君臨し、この市の影の首長と呼ばれているこの男は、年齢不詳ながら七十は越えていると思われる。後退し禿頭を隠せない頭髪はほとんどが白髪であり、老人班やシミも目立っている。しかし眼だけが異様に大きく、落ち窪んだ眼窩に爛々と輝くそれはアンダーグラウンドの怪物にふさわしい精力に溢れているようだった。

「いやあ、渥美さん、ご苦労様」

代わりに如才ない笑顔を見せたのは佐伯弁護士。黒縁の眼鏡が光っている。

「ま、とにかく中へ——」腰の低い渥美が先頭に立つ

て歩きだした。

おやっと、佐伯が安藤一平に気が付いた。

「どうしたんです、安藤君。こんなに遅くまで」

まだ四十代半ばの一平はこの中では若輩であり、貫禄不足も甚だしい。つるんとした顔を卑屈に歪めて笑っているが、雰囲気飲まれたように声にならないのだ。金のマルチ販売だの先物取引だの、悪徳商法まがいの小悪企業の社長風情が本来、雁金と同席するなどありえない事なのだが……。

「フフフ、やはり従妹の様子が気になるのかな」

「はあ、まあ……」佐伯の言葉に曖昧に答える一平。

「一平さんは子供の時分から、あの女に思いを寄せていたんですのよ」

白衣に黒のカーデガンを羽織り、婦長の地位を示す二重線の入ったナースキャップをかぶっている佐々木加奈江が笑った。

「積年の想いが遂げられるのだから、時間が経つのなんか、かまっちゃいられんですよ」広瀬も笑いに同調した。「おかげでプログラムは予定より捗っていますが」

地を這うような淫靡な笑い声が反響する。一行は各階へ通じる一般のエレベーターホールではなく、荷物機材搬入用のエレベーターに乗りこんだ。渥美が地下三階のボタンを押す。

「渥美君——」乾いた、抑揚のない声。初めて雁金が

口を開いたので全員が緊張する。

「メドはどのくらいだね。二週間後か、三週間後か」

「はっ、もう少しかかると思っています。なにしろ殺してしまっっては身も蓋もありませんし」

「とにかく春休み中には、すべてを済ませてしまいたいわけだ。わかってるね」

ジロリと眼球が渥美を見上げ、その鋭い視線に海千山千の病院長も縮み上がる。怪異な容貌とあいまって、雁金の言葉は妥協を赦さぬ響きに満ちている。入来啓太が思わせ振りに拳を鳴らした。

「も、もちろんそれまでには仕上がると思えます。いや、何としても仕上げてみせます」

「当然だ。佐伯、禁治産者宣告の手続きは整っているだろうな」

「はい。後は書類に判を押すだけになっております」

「学園の新しいスタッフの手配は抜かりないか」

「教員から事務員まで、粒揃いのメンバーを全国から——」

別に今日初めて会った二人ではあるまいし、こんな業務報告はとっくになされているはずだから、すべては渥美らに対するハッパに違いなかった。

「そうか。よろしい」

雁金の貌が初めて引きつったような笑みをみせ、ステッキで軽く渥美の股間を叩いた。

「渥美君、後は君たちの首尾を待つばかりだ。私もここまで費やしてきた労力を無駄にしたいくはないのでね。忠金屋グループの傘下に入った以上、それ相応の仕事をしてもらわねば困る」

「おうせの通りで……」

「渥美総合病院の将来のためには」と、もう一度ステッキがその部分を撫で上げ、

「ここと頭を精一杯使って精進せねばならん」

病院関係者以外の三人が哄笑する。

エレベーターが止まった。扉が開くとすぐその正面に鋼鉄製の頑丈なドアが行く手を遮っている。関係者以外立入禁止の貼り紙。佐々木婦長がカード・キーを挿入口に差しこんだ。軽い電子音とともに、ドアのロックが外れた。

一本の通路の両サイドに無機質な漂白された扉が並んでいる。

「吉田和美の時に来たのは何つだったか」

雁金の問いに佐伯が、暮れも押しつまった頃だったと答えた。

「あの女社長もまだおりますよ。ご覧になりますか」

広瀬が二号室と札のかかったドアを指差す。ドアにはそれぞれ開閉式の覗き窓が付いていた。

「いや、よろしい。異常者になった女など見てもムカつくだけだ。今日は異常者になりかかった女を見にきた

のだからな」

恐縮する広瀬。加奈江が十一号室の前で立ち止まり、窓を開けて様子を窺っている。

「さすがのスポーツマンもお休み中のようね」そう言ってノックをくれる。

ドアがゆっくりと開かれた。姿を現したのは上半身裸で腰にバスタオルを巻いただけの男。なんとそれは星饒女子学園の体育教師、権藤ではないか。

「いやはや、こんな格好で申し訳ない……」

権藤は頭を搔いているが、湯上がりのような身体の火照り具合と、生臭い性臭が立ち籠めているところからみて、一戦、終了した直後に違いなかった。

「君も彼女にぞっこんの口かな」佐伯が笑った。

どうぞどうぞと、ドアが一杯に広げられる。

「何といっても私の上司にあたる方ですからね。見舞いがてら来てみれば治療に役立つって吹きこまれましてね。毎日、アイスクャンディみたいな小娘ばかり相手の商売ですから、たまには豚汁並みの高カロリーも腹に収めたいわけでした」

とても教師とは思えない言葉がポンポン飛び出す権藤に招き入れられると、中の酸鼻な光景に、常に泰然としている雁金はともかく、佐伯弁護士と、それに入来がうっと唸って立ち止まった。

部屋はそう狭くもなかったが、壁際にびっしりと並ん



でいる機械類が幅を取っている。そこから無数の銅線だのニクロム線だのが、部屋の中央の大きなベッドに伸びている。ベッドは黒皮のレザー張りだ。皓々と眩しいくらいに輝く天井の照明器具に照らしだされて、そこに大の字に拘束されている女——。レザーの暗黒に鮮やかな対称を見せる、乳白色の全裸を惜し気もなく開き切っていた。生臭い体臭をさせているのは、何も権藤ばかりではなく、ヌルヌルと汗ばんだグラマーな全身と、汗とは違う分泌液で内腿までギトつかせているあられないザマを晒す、その女もまた激しい性交の直後であろう。ここからでは彼女の貌を見ることは出来なかったが、こんもりと盛り上がる密茂の毛叢に蔽われた毒々しいまでに黒光りしている陰部には、壁際の機械装置からの線がつながった大小二本のバイブが深々と沈められている。前後の肉口が極限にまで拡張され、あれでは完全に腰の箍が砕けているに違いない。もちろんそれらはジージーとモーター音をたて、ねっとりとした蠢きを繰り返している。さらにまた彼女の三ヶ所の急所——双つの乳頭とバイブに練られて涎れを垂らしている膣口あたりの陰核——には天井から下がったテグス糸が結びつけられているのだった。おかげで巨乳と呼んでいいバストは紡錘の形に吊り上げられて肉の鐘のようになっているし、でんと重量感のある腰部が心なしか浮いているのだ。もちろん乳首も肉芽もそれぞれに痛々しいまでに充血してい

た。

安藤真知。星饒学園理事長の変わり果てた姿である。

取り囲むようにベッドの傍らまで進んだ彼ら。驚いたことに真知は意識を失ってはいなかった。長い睫毛を緩慢にしばたかせながら、精気のないとろんとした眼差しを天井へ送っている。何日も櫛の通っていない頭髮がバサバサに乱れ、額を覆っている。眼の下には隈が浮かび上がり、もともと瓜実の貌はげっそりとコケていた。化粧っ気のまったくない四十四歳の肌はすさみが目立つ。とくに小鼻の脇の荒れがひどい。唾液の分泌が多いのか、半開きの唇の合間にアブクがふくらんでは消えている。彼女はときおりそれをズズッと啜りこんでいるのだ。精も根も吸い取られたようになっていく容貌とは逆に、大の字に仰臥させられた肉体は、脂身の厚い、こってりした大年増特有のムセ返るような色香を放っていた。

「薬は使っているのかな」 雁金が尋ねた。

「ええ、多少は。なにしろ連れこんだ当初は暴れて手に負えませんでしたからな。向精神剤を投与して鎮圧しました。その他は性ホルモンの注射と媚薬程度ですか。詳しくは広瀬神経科長の方からご説明を」

「麻薬は射ってないだろうね」と、佐伯。「警察関係が何かとうるさいからね」

「ご心配なく。いくら手っ取り早く禁治産者を造れる

からといって、危ない橋は渡りません。真知はこの年齢にしては強い心臓を持っていますからね。長期間に及ぶ性欲昂進プロセスにも耐え得ると判断しています」

ほんとですわ、と広瀬の話に続けて佐々木婦長が言った。鼻の脇に大きなイボをつけたこの女、年齢は五十代後半か。

「心臓に毛が生えてるんですよ。何度か白痴になった振りをして私たちをだまそうとしたんですよ。一度、私も油断して、指に噛み付かれたことがございますわ」

加奈江は憎々しげにクリトリスを吊り上げている糸をピンとつまびいた。

「うう——」女理事長は仰け反りながら獣のような呻き声を上げた。四肢に力が入り、拘束している皮ベルトが手首脚首に食いこんだ。

「安藤真知——」

雁金はそう呟くと、皺にまみれ、黒蒼い血管が浮き上がった手を彼女の貌にかけた。

「岩下志麻のような生意気な鼻をしおって」

力任せに摘んで右に左にねじ曲げる。どちらかといえはふくよかな真知の鼻の頭が雁金の親指と人差し指の間で潰れ、桃に染まっている。眉間につらそうな縦皺を寄せ、フガフガと鼻を鳴らす真知。

「雁金誠一の申し出をけんもほろろに突っぱねおって。その鉄火の報いがこのザマだ。あれほどこの世界は

甘くないと忠告してやったのに、それを無視するからとうとう尻の毛まで鬚り取られることになるのだ。聴こえるか、わかるか、安藤真知。お前のような理想だけが先走った、無能な経営者はあの学校にはもういらんのだ。理事会がそう私に泣き付いてきた。だから私がもっと有能な人間を探してやることにする。お前は馘だぞ。ん？わかるか。しかし資源は有効に活用せねばならない。世を上げてリサイクルの時代だ。お前の根性を鍛え直し、残り少ない女の盛りを、男子のために奉仕するエロ女給として働かせることにした。いいな、安藤真知」

雁金のギョロ眼がいつそう爛々としている。雁金には女の鼻に異常に執着する変執的な癖があるらしい。渥美は先程話に出た吉田和美を思い出した。あの時も酷かった。鼻枷で極限まで吊り、鼻毛を一本一本抜きながら因果を含めるのだ。しまいにはアナル用のバイブを挿入し……。気分の悪くなった渥美は早々に退散したものである。

「安藤社長」と雁金は女理事長の鼻を髑ったまま、一平を振り返る。

「決心はついているんだろうね。この女の一番の近縁者である君が禁治産者宣告を求めなければ、話にならないわけだが」

「もちろんですとも」

一平は卑屈にペコペコしながら揉み手をする。今更、

断れるわけがない――。

佐伯弁護士が一平に近付いてきたのはつい一カ月前だ。悪徳商法といえども最近はこの市のような都市部では仕事になりにくいし、法律も厳しくなっている。地方に展開するにはそれだけ資金も必要で、バブルが弾けた今となってはそれもままならない。そもそも安藤家は代々文化系に人材を得ている家柄なのであって、一平のような人間は稀れ、その血筋が災いしてか、彼には本物の悪徳商人としての狡猾さが欠如しているのかもしれない。そういうことだから、今までも何度か、この従妹には援助を仰いできてもいた。彼女には兄弟がなく、両親も早死にしたから、歳の近い一平を慕っていたが、彼が胡散臭い事業に手を出してからは疎んでいるようだった。女子校の理事長が違法スレスレの仕事をしている人間と仲良くするわけにもいかないのだろう。それでも無理矢理面会した時には、多少の意見を述べた後、かなりの金額を用立ててくれるのだ。一平にしてみれば、子供の頃仲良く遊んでいた年下の、それも女に頭を下げ説教を聞かされるのは、背に腹は返られないとはいえ、やはり屈辱であったが、彼女のところへ通い詰めるのは金銭ばかりの問題ではなく、真知への止みがたい恋慕の情が続いていたからであろう。年若い時分から真知の美貌と頭の良さは秀でていた。誰からも愛され、まわりを明るくし、リーダーシップを取っていた。自分がこんな道に

入ったのも、真知が余りにも出来すぎたために、屈折した青春時代を送ってきたからだとさえ思うほど、彼女はマドンナであった。

そのマドンナも、さすがに一平のタカリが頻繁になってくると露骨に嫌悪を示すようになってきた。真相は学園の方が急を要する事態に陥ってきたため、不良従兄の援助どころではなかったのだろうが、一平の歪んだ彼女のへの想いはさらに複雑にねじ曲がり、ドス黒い暗雲となって鬱屈していった。可愛さ余って憎さ百倍――。

そうした感情は佐伯の訪問を受けた時、一気に身体中を支配していったのだ。

『安藤真知を抱きたいとは思わないか』

佐伯は開口一番そう切りだしたのである。ばかりか、会社の面倒も見てくれるという。見返りに何を提供すればいいのか――彼らの魂胆は小悪党安藤一平の想像を越えたものだった。忠金屋グループの星饒学園乗っ取り計画に、支障をきたす存在である安藤真知理事長を機を捉えて精神病棟に軟禁し、精神異常患者に仕立て上げ、禁治産者宣告をして一気に経営権を奪い、雁金の息のかかった人間にそれを引き継がせようというのである。

『まさか……あの健康で気の強い女がそうやすやすと禁治産者なんかになるのでしょうか』

一平が三流のポルノ小説のような話に二の脚を踏んだのは言うまでもないが、それではいいものを見せて上げ

よう、と笑う佐伯にここ渥美脳神経科病院に連れてこられ、銀座の老舗宝石店の女社長、吉田和美の廃人と化した様を見せ付けられるに及んで、さすがに信じないわけにいかなくなった。和美も忠金屋グループに齒向かった口であるらしい。しかしこれでは——と、近付きの印に進呈された和美の肉体を貪りながら一平は思った。経営権どころか人格すら奪ってしまうことになるではないか。立派な大罪に違いない。けれども、一平はもう佐伯に異を唱えはしなかったのだ。人格をズタズタにされ、色情狂に変わり果てた真知こそは、俺にふさわしいかもしれぬ。そんな状況にならない以上、あの女との対等な関係はもう戻ってきはしないだろう。

一平は仲間に加わることを承諾したのである。

今だに初めて真知を姦した時の歓喜と昂奮が股間に残っているようだ。すでに渥美たちにぐうの音も出ないほど陵辱され、さらに佐々木婦長の鞭打ちまで浴びて屈服していたかに見えた真知は一平の顔を見るや最後の気力を振り絞るように激しい抵抗を示した。薬を飲ませればおとなしくなるのを、一平は断った。一度くらい正気の本真知を抱いておかなくては一生後悔するではないか。奥歯をキリキリと噛みしめ、噴辱に真っ赤になった従妹の美貌を眺めながら本懐を遂げた時の痛快さは、悪魔に心を売ったという痺れるような罪悪感とともに、一平の胸の底に沈澱していたサディズムが、もくもくと沸き上が

ってきたことを意味するのだった。真知の肉の構造は予想通りの、いや、予想以上の極上さで一平を包みこんだ。彼女の白い肌は吸い付いてくるような肌理の細かさだった。乳ぶさは柔軟で弾力があり、双臀の割れ目に鼻先を突っこんでも女の芳香が感じられた。医療的な措置が次々に講じられるにつれ、しだいに意識を喪失する時間の多くなった彼女を一平はしつこく抱き続けた。この大年増の肉体は改造され、あらゆる刺激に反応するようになっていたから、憎き裏切り者の親類とのセックスでも真知は連続してオメキを上げた。肉体の変貌は心の破壊につながり、現在では彼女の理性や知性はピンク色の繭にくるまれ、正真正銘の色ボケした牝に生まれ変わるよう、羽化する日を待ち続けている。そしてその日こそ、一平は何の銜いも昂ぶりもなく、この女を受け入れることが出来る日に相違ないのだ。Xデーはもうすぐそこに迫っていた。

「……もちろんですとも」一平は重ねて雁金に言った。

「身内の、雁金先生に対する粗相は目に余るもの。私の微力によるしければなんなりとお申しつけください。責任は果たさせて戴きます」

雁金はフンと鼻を鳴らし、今度はステッキで女の臍の辺りを打ち据える。裸体が揺れるたびにテグスが緊張し、繊細な部分に激痛が走るのか、低い呻きを発する安



藤真知。その身震いがまたまた急所に跳ね返ってき……  
波紋のように繰り返される拷問の苦痛だ。

「まったくと助平な身体だ。安藤真知。一度、獻かせてやれ」

雁金は渥美に指示し、渥美は広瀬を促す。

「この女のここも、最初の頃はまだ少し赤みが残っていたんですがねエ」

股間を覗きこんだ広瀬はそうを言い、むっくりと広がっている陰唇の縁を指でなぞった。

「今じゃテカテカと黒光りしてやがる」

がちり食いこんだバイブを練れた手つきで捏ねくりながら、すえたマン汁の臭いに苦笑する。加奈江が機械類の操作パネルへ向かい、ボタンを押した。と、モーター音が大きくなりはじめ、うねりが早くなる。肛門を貫くドリルも自転するように抉っている。それだけでなく、天井にも仕掛けがあるらしく、三本の糸はおのおの別々に緩んだり張り詰めたりしはじめるのだ。左の乳ぶさが解放され、自らの重みで扁平になったかと思えば、右の乳ぶさがこれまで以上に持ち上げられる。クリトリスを懲らしめている糸の伸縮率はそれほどでもなかったが、哀れな人身御供に絶叫を上げさせるには十分だった。頸をそれこそ狂ったように振り、悶え狂う真知の全身に新たな脂汗が滲みだす。水平に広げられた両腕の腋窩に繁る、貌に似合わぬ濃密な黒毛に酸味の強そうな汗

の雫が溜まっている。この女のそれが特徴なのか、貌全体が燃えるように真っ赤になって照り返しのように胸もとまで赫らんでくるのだ。容赦のない的確な機械の刺激と、広瀬のすかしたり抉ったりする自在な手管とが、四十四歳の爛れ切った年増女の身体をドロドロに蕩していく。先程までのネトネトと慢性的の如く分泌されていた絲蜜は、今や見ているほうが羞かしくなるくらいの大湧水を遂げて、広瀬の指まで汚している。

「真知はこのGスポットを擦られるとプツツンしちまうんだよなあ」

発情にチリ立っている陰毛を撫でながら広瀬の攻め手が激しくなると、真知は断末魔の咆哮を上げながら、トロリと涎れを垂らした。

「ううっ、ああ……おっ、おっ、おっ……」

口を楕円形に突き出し、牝猿のように吠えたて充血した瞳を一杯に剥き出す姿に、かつての真知を知る者——中村久美子を初めとする学園関係者、そして何より星饒の女子生徒たち——は信じられないだろう。連日連夜の激烈な性的刺激はこのように女を狂わすものなのか。眼前の女理事長はまさに痴女そのものである。

雁金が二本の指を美唇へあてがうと、痴女は自ら求めるように、しゃぶりついた。眼をギュッと瞑り、鼻の穴を丸めるようにして、チュパチュパ音をすら立てて貪り吸う彼女にとっては、唇や舌といった性感帯のピリピリ

痺れるような火照りに対する格好の刺激なのだろう。

しかしまもなく、そのおしゃぶりすら満足に出来ないほどの官能の波が全身を包んだ。

「ヒューッ——」安藤理事長はあられもない嬌声を発して、白い歯並びを剥き出しにした。腰と背が浮き上がり、ちょうどレスリングでいうブリッジの姿勢に弓なりになった。彼女の、セクシーな皺の刻まれた眼尻から随喜の涙がとめどもなく流れた。田楽刺しのバイブがとても人間ではこうはいかないだろうと思えるほどのスピードで女芯を抉り、三本の吊り糸は一斉に引き詰められた。

「くっ、くっ、くっ……」

大口を晒して、喉ちんこを断続的に鳴らす真知。崩壊寸前と思われたその時、彼女は突如、頭を狂ったように前後させて己れの後頭部をベッドに激しく打ちつけ始めたのだ。

「いかんっ、押さえる！」

渥美が叫び、広瀬と加奈江が飛び付いた。広瀬が必死になって押さえ付けようとするも、その手を振り解き、がんがんと頸を揺らし続けるのだ。下がベッドでなくコンクリートでもあれば、とっくに頭蓋骨がカチ割れているであろうほどの激しさである。

「やむをえん。鎮静剤を注射するんだ」

渥美の指示に、加奈江は広瀬に枕を渡し、素早く注射

器の用意をする。余りの暴れように、とうとう渥美院長も加勢して真知を押さえこんだ。ゴムバンドを二の腕に巻き、浮き上がった静脈に鋭い針が挿入された。

数十秒後、ようやく真知はおとなしくなり、ぐったりと豊満な身体から力が抜けている。

「ど、どういことなんだ、渥美君」呆気に取られていた佐伯が尋ねた。

「つまり、まだ完全に色ボケしているとは言えないのです」

渥美が額の汗を拭いながら答える。

「こんなに凄まじい狂態を演じているのにかね」

「そう、たしかに我々の眼で見える部分の安藤真知は完全に異常を極めています。この女自身の意識もすでに粉碎されているでしょう。しかし——」

しかし問題は無意識として潜在化した抵抗心なのだ。例えば催眠術をかけて殺人を命令したとしても、教育、宗教、道徳などにより後天的に刷りこまれ無意識下に潜在している『汝、殺すなかれ』といった社会的規範が行動を抑制するため、成功しないのと同じように、安藤真知にもこちらの狙い通りにはならない無意識の反抗があって、ときおり、さっきのような激しい自傷行動となって顕在化する。これは貞操観念が人一倍強く、気性の荒い女に稀に見られるものである。

「非医学的な言葉を用いれば、怨念、という奴か」

佐伯は思いも新たに真知を見直した。

「その通りですな。ま、これがなくならなければ100%の洗脳とは言えない。無意識が何かの拍子で意識に戻る可能性がないとは言えませんから。しかしご安心ください」

と、雁金に向かって念を押す渥美。

「こんな自傷行動も十回のうち一回程度と、頻度は日に日に下がってきています。遠からず克服できるものと確信しております」

「吉田和美にはなかったが、安藤真知にはあるのだな。最後まで世話を焼かせる女だ」

雁金は再びステッキを振り上げ、筋の浮き上がっている太腿をきつく殴打した。

一行は院長室の隣のゲストルームに引き上げてきた。入来姿が見えなかったが、彼には日頃の忠勤の褒美として、真知の肉体が与えられている。注射でフラフラにされている真知だから、さっきのようなおかしなことにはならないだろう。巨漢入来の絶倫セックスに、裏にされ表にされ、歓喜の戯き声を上げているに違いない。一平も入来とともに残った。彼の頭の中は真知で一杯なのである。ただ、マドンナが自分以外の男に抱かれていても昂奮するところが、尋常ではなかったが。

「啓太のペニスはまた格別デカいですからねエ」佐伯が眼鏡を拭きながら言った。

「あら、真知のあそこだって相当なものですよ。大蛤と言ってもいいくらい」

ミニバーでオードブルを作ってきた佐々木婦長は、佐伯の横に坐りながら笑う。

それぞれウイスキーの入ったグラスを手にしているが、雁金だけは日本酒だ。

「いずれにせよ濃厚な肉弾戦が展開されていることでしょう」佐伯は眼鏡をかけ直した。「ところで権藤先生、星饒女子学園の方はどんな具合ですか」

佐伯に報告を求められた権藤はシャワーを浴びてジャージ姿になっていたが、手もとにあったアタッシュケースを開けて、中から書類を取り出した。

「えー、リベラル派に対する切り崩しは順調に推移しております。国語の山崎、美術の佐藤、英語の白石、各人はこちら側につきました。先週の職員会議で広沢教頭が私のタカ派的な主張に一部賛意を示唆したのが、大きく影響したのと思われます。理事長交替の噂は入院の公式発表と同時に一気に表面化、雪崩をうって寝返り者が出てくるでしょう。職員会議で過半数を制するのはもう時間の問題と言えます」権藤はチーズをかじった。

「どうしても態度を変えそうにないのは、古くから星饒にいる生え抜きの教師たちより、比較的新しい教師たちですね。意外なようですが、彼らが安藤真知理事長に理想を吹きこまれて、赴任してきたことを考えると納得も

出来るのです。学園支配には彼らの一掃が必須となるでしょう」権藤はコピーを全員に配った。

「その急先鋒が数学の鈴木俊雄と養護担当の中村久美子——」

コピーにはリベラル派と権藤が呼ぶところのグループの、主立った面々の詳細な身辺調査が書きこまれていた。顔写真さえ付いているその報告に広瀬がヒューと口笛を鳴らした。

「まさに微に入り細に入りですな。家族構成まで調べている」

しかし皆の目が行っているのは、そういった細々とした記述ではなく、中村久美子の写真である。なぜか彼女だけは顔写真ばかりか全身像も添付されているサービスぶりだ。色白中高の女らしい色っぽい美貌。スラリと均整の取れた抜群のスタイル。たぶん毎年秋に催される全校挙げての球技大会のうちに、バスケットボールに教師枠で出場した時のスナップ写真だろう。ズボンと青色のジャージと色気のないものだが、上は二の腕剥き出しのスポーツシャツ。ふくよかな胸の隆起が否が応うにも眼を奪う。豊富なセミロングの黒髪を無造作にアップにまとめているため、形のよい耳たぶや美しい首筋があらわになり、やや火照り気味の貌と半円に開いた胸もとが汗で光っている。競技終了後に生徒たちと談笑しているらしく、魅力的な笑顔が印象的だ。

居並ぶ中年男たちばかりでなく、佐々木加奈江も注目する美女である。

「とても教師とは思えませんわね。色気過剰ですわ」

「この肌の色艶だとノーメイクだな。素晴らしい」

佐伯は眼鏡をずり上げて食い入っている。

「うーん、さすが二十八だけに、女真っ盛りだな。とうの立った安藤真知とはまた違う色香がある」渥美院長も舌舐めずりせんばかり。

「右半身と左半身の筋肉のバランスが完全に取れている。神経生理学的にもなかなかいませんよ、こういうサンプルは」

広瀬は自分の専門分野から女を観察するのが常だ。

ただ一人、雁金誠一だけが一瞥をくれただけで平然としている。彼の年齢から言えば女とは安藤真知のような熟女、せいぜい三十代後半以降を指すもので、久美子などはまだ小娘の部類に属するのかもしれない。

「この可愛い貌に惑わされていると、えらいめに遇いますぞ」

すでに美人教師を我がものにしたような雰囲気なたしなめるように、権藤は咳払いをした。

「中村久美子は手強い相手です。気性が激しいだけでなく弁舌は鋭いし、何ととっても生徒や父母の信頼が篤い。他の教師たちも一目置いている存在なのです」

「そうは言っても所詮、女だよ、権藤君。真知を見た



まえ。悪徳医師の手にかかれば、牝狸だってあの通り……」佐伯弁護士が渥美の肩を叩く。

「フフフ、悪徳医師や悪徳弁護士を敵に回してかなう一般市民はいないですぞ。女に限らず、ね」

渥美も佐伯の肩を叩き返し、哄笑した。かなりアルコールが入りだしている。

「問題なのは久美子が緊急事態に陥った場合、シンパが騒ぎだすという事なのです」

と、権藤はややムツとして付け加えた。

「シンパ？」加奈江が聞き返す。

「そう、生徒会長の好本ゆみを筆頭にした生徒たち——」

「生徒会なんて君、子供のお遊戯じゃないのかね」  
またまた腹を抱える佐伯たちを雁金が制した。

「好本？ 今、好本と言ったか？」

ドンの厳しい目付きに佐伯も渥美も押し黙った。

「そうです。あの市会議員、好本早苗の娘です。今度三年生になるゆみは久美子と親しく、私のことを生徒会を通じて調べようとしているような跳ね返りです。星饒学園の生徒会はかなりの自治権が与えられていますからね。子供が騒ぎだすとかえって厄介な面がある。首を切って入れ替えるわけにもいきませんから」

「なるほど。好本早苗が絡んでくると話は難しくなるな」腕組みをする佐伯。

「フフ——」笑い声を洩らしたのは雁金であった。

「面白くなってきたようだな。ひょんなところから、この市を一気に正常化するチャンスが生まれてきたかもしれん」

「先生。と、申しますと？」佐伯以下が身を乗り出した。

「お前たちもマドンナ議員を抱けることがあるかもしれん、ということだ。それにしても相手が政治家となると失敗は赦されない。一つずつ、駒を詰んでいく手を考えねばな。差当り、この男——」と、権藤の報告書の顔写真を指で弾く。皆が一斉にコピー手に取った。それはリベラル派のリーダー格の一人、鈴木俊雄であった。

「はあ、この男ですか……あれ、こいつ！」佐伯が頓狂な声を上げた。

「鈴木俊雄五十三歳、妻みどり二十四歳だって！ まるで娘じゃないか」

「尋常ではありませんな」渥美も憮然として言った。  
つい最近ですよ、と権藤が説明した。

「結婚したのは。えーと二年前だったかな。この女房は何しろ、三年前、うちの学校に教育実習生として派遣されてきたんですからね。それを鈴木が見初めて、あれよあれよと言う間にゴールイン。未だに冷やかしの対象となるくらいの『事件』だったわけですね」

許されるのか、そんな話、などと佐伯も渥美も憤まん

やる方ない様子。

「素晴らしい——」

雁金が割って入った。

「常識を逸脱した行為にはどこか無理が伴うものだ。その無理にこそ、我々の付け入るチャンスがあるというもの。権藤、この夫婦をもっとよく調べるのだ。最初の細工がうまく運べば、将棋倒しのように事は進む。最後の獲物はさぞや大きいに違いあるまい——」

雁金はすっと杯を呷りながら言葉を収めた。部屋はしんと静まり返っている。まるでこれから始まる大捕り物の予感に、全員が妖しい昂奮を覚えているように……。

## 忍び寄るマドンナ包囲網

閑静な住宅街の一角にある好本家はいつもの朝を迎えていた。庭に植えられたハルニレの樹に群がる小鳥たちの囀りは春の到来を告げるように賑やかだ。

「ゆみ、ちゃんと朝は食べていくのよ」

好本早苗はまだパジャマ姿で縁側に胡坐をかき、新聞を広げている娘に言った。

「わかってる」ゆみは気のない返事をしながら生欠伸を噛み殺す。

「まったく……そんなところでお父さんの代わりなん

か、しなくてもいいのよ」

早苗の夫、ゆみの父、隆之は先月からフランクフルトの大学に単身赴任中なのだ。ドイツ文学者として著書も多い彼は、今回は三ヶ月の短期間、日独比較文学論の講師として招かれている。

食事中に朝刊を読む癖はその父親譲りで、早苗は苦笑混じりに注意しているわけだ。が、早苗にしても今日はその新聞を取り上げてまで小言を言う時間の余裕はなかった。いや、早苗が市会議員選挙に当選して以来このかた、ほとんど母親らしい気配りはしてあげられない。多忙をきわめる議会活動は、深夜帰宅、早朝出勤が余儀なく、娘と貌を合わせる時間も事欠く有様である。とくに早苗のような人気議員の場合、それにあやかろうと引く手数多でつまらぬ雑事も多いのだった。出来るだけ仕事を絞り、家族との時間を増やしたいのだが、選良の立場ではそうも言っていない。夫や娘の理解ある対応が救いではあるものの、隆之が不在となりゆみ一人の生活が頻繁になればやはり心配だ。彼女は今春、いよいよ  
▲▲三年生の大事な時期を迎えるのである。

「ママ」と、ゆみは自分の部屋から出てきた母親へ声をかけた。

「なに？」

こちらを振り向いた母親。眼に染みるような深紅のブレザーとスカート。白いブラウスの幅広の衿を表に返

し、わずかにかいま見える乳白色の胸もとに金のチョーカーが光っている。さすがに美人マドンナとして世間に喧伝されるほどの美貌は冴え渡っていた。肩まである艶やかな黒髪をアップに纏めているため、額が理知的に輝いている。程よい化粧が目鼻立ちをくっきり浮かび上がらせ、聡明さを滲ませていた。なにしろ彼女の年代にしてはプロポーションが抜群だ。すらりとした背、胸も腰も厚く、パットの入った肩がムツと盛り上がっている。

「なにジロジロ見ているのよ。いやねえ、この子ったら」

「パパの代わりに見惚れてあげているんじゃない。綺麗よ。ママ。議長が鼻の下を伸ばして名前を言い間違えたのも、さすがに無理ないな」

「こら、ゆみちゃん。あれはね」

「いいからいいから、謙遜なんて聞きたくありません。成熟した女の色香は同性のわたくしさえ、クラクラしますわよ」

ゆみの頭の回転の早いユーモアに、早苗は声を上げて笑った。

「で、今日の会議、出席できるんでしょうね」

ゆみは急に真剣な眼差しになって尋ねる。悪戯っぽく大人びたことを言っていた貌が、xxの真摯なものに豹変する。青春真っ盛りなのだと母親は思う。

「もちろんよ。三時半、だったわね。それまでには委

員会も終ると思うわ」

早苗は約束する。一週間も前からゆみに言われていたのだから忘れるわけにはいかない。今日は星饒女子学園▲▲のPTA幹事会なのだ。PTA副会長でもある早苗はそこで学園に問題を起こしている暴力教師について取り上げる予定なのだった。

「くれぐれもうまくやってよ。証拠はないんだから」

「わかっています。これでも議員なんですから、追及はまかせなさいって」

早苗は豊かなふくらみを見せる胸をポンと叩いた。本当は市議会を牛耳る長老派が市長と結託して利権を漁っているという、ある内通情報をもとに、市民派の早苗が先頭になって行動を起こそうとしている大事な時期でもあり、猫の手も借りたいほどの忙しさだったが、このくらいは愛娘のために是非してやらねばと、無理に時間を作ったのである。それにゆみの話によれば、ただの体罰だけではなく、破廉恥な行為の疑いもあるのでは黙っているわけにはいくまい。

「久しぶりにゆみの授業でも覗いてみようかしら」

「ひゃーっ、やめてくれエー」

ゆみは新聞を放り出し、立ち上がった。ポニーテールの髪がさっと揺れ、早朝の陽光にシミ一つないピチピチした横顔が照らされて輝くようだ。

「お見せするほど面白いものではありません」

そう言って壁に掛かっている時計を見、慌ててパジャマを脱ぎ始める。上着を取ると素裸の上半身があらわになった。

「ゆみちゃんっ、こんな所で脱いたら外から丸見えよ。自分の部屋でやりなさいっ」

ゆみの奔放さにも困りものだ。いったい誰に似たのだろう。

「見たい人には見せてやるさ」

あっというまにズボンも脱ぎ、純白のパンティー一枚の姿になったゆみは跳ねるように二階の部屋へ駆け上がっていく。

「行ってらっしゃーい」

「もう……それじゃ、お母さん、先に行きますからね。ちゃんと食事、済ませなさいよ」

「ハイ」

ゆみの返事を背に聞きながら玄関へ向う早苗。

(それにしてもあの子、ずいぶんグラマーになったわ)

少なからず驚いた。自分の▲▲時代を思い出せば嫉妬を覚えるほどだ。形も良くたわわな乳ぶさはツンと上を向いている。ほっそりくびれたウエストから、はち切れそうな双臀のまるみはすでに女を感じさせる。ただ食料事情の違いだけに早熟の原因をもとめるにしては、あまりにも豊満すぎはしないか。早苗はふと色付いた予感に

胸騒ぎした。

（あの子に限って無分別なことは——）

いくらなんでもまだバージンだろう。奔放ではあるけれども、頭のいい子だから異性交遊は節度を保っているはずである。それよりも早苗が気になったのは、あんな魅力的な娘が大勢いる女子校にわけのわからない教師を置いておく恐ろしさだ。羊の群れに狼を放し飼いにしているようなものではないか。是非とも真偽のほどをつまびらかにしなければならない。母親と不正を追及する女性議員の間を揺れる早苗である。

靴を履こうとした時、電話が鳴った。

「いいわ、ゆみちゃん、私が出るから」電話は玄関と居間の口にある。

「ハイ、好本ですが」議員の中にもファンが多い、済んだメゾソプラノの声。「もしもし、どちらさまですか？」

「化粧が濃いぞ。好本早苗」

「は？……」

「牝豚のくせに化粧なんかするんじゃない。好本早苗」

「——」嫌がらせの電話である。夫がドイツに行っている以来、つとに増えている。妙に脂ぎった声だが、微妙に加工しているらしい。

「切るんじゃないぞ、好本早苗。このまま正義の味方



面していると、えらい目に遇うぞ」

「どういことですかの！」

ただの痴漢電話ではないようだ。早苗は電話の録音機能を作動させた。早苗の長老派追及の動きを察知して、影に日向に彼らの圧力がかかり始めていた。これもその一つだろう。

「とぼけるな。ジャンヌダルク気取りでピーピー騒いでいると、いつか火炙りになるんだぞ」

「あなた、どなたです。男だったら正々堂々名乗ったらどうなの」

「ほざくな、好本早苗！ 肉饅頭みたいな身体しやがって。お前くらいの歳になると、xxxのビラビラも巨きくて黒光りしてんだろ。誘拐してその写真を撮って、市民にバラ卷いたら、すぐに落選だ。わかってるな。女は女らしく家で炊事洗濯してりゃいいんだよ。これ以上、へたな真似をしたら電話だけじゃ済まなくなるぞ！」

「誰にお金をもらってるの。警察に言うわよ」

「夜道に気をつけろっ」

ガシャッと電話が切れた。まったく不愉快なものだが、早苗は親しい議員に勧められるように自宅の電話番号を変えたり、伏せたりすることはしていない。常に前向きにやっていきたいからだ。しかし今のような聞くに耐えない電話を娘が受けたらと思うと、ぞっとしてしま

う。何か対策を講じた方がいいのだろうか。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。  
#####

## 乗っ取り成功

寝耳に水の理事長交替劇は卒業式の翌日発表された。安藤真知理事長の病状は思わしくなく、家族が禁治産者宣告を求めているくらいだから、とても激務への復職は不可能と理事会に報告されたのだ。学園の経営基盤が揺らいでるおりでもあり、彼女に対する同情論も出ず、即刻討議裁決の結果、安藤理事長の解任を決定、代わりに同市の学校法人河徳学園副理事長、河徳 昂の就任が認められた。

河徳学園はもちろん忠金屋グループの傘下にある男子▲▲だ。当然のようにその評判は芳しいものとはいえない。売名のために近隣県から生徒を強引に集めて運動部を強くしたり、その露骨な男尊女卑教育は市教育委員会からたびたび事情聴取されたりもしている。全国各地で体罰事件を起こして免職になった教師たちを寄り集め、徹底した管理教育を推し進めている。学校の姿勢がこん

なだから生徒たちの心も荒んでいく。むろん校内暴力など起こすすべもないが、その鬱屈を校外で発散しているのだ。新聞に載る不良事件の多くに、河徳学園の生徒が絡んでいると言われている。もとより私立であるため行政側も強い指導は出来ないのだが、真相は背後にちらつく雁金誠一の影である。どこの市にもある典型的な問題▲▲が、さしたる処分や制裁を受けないのはその豊富な政治力経済力がバックにあるためだった。

星饒女子学園とは水と油、月とスッポンほどの差がある河徳学園の副理事長の登用は、星饒の教師たちに大きな衝撃を与えた。事実上の忠金屋グループによる乗っ取りなのだ。ただ、星饒学園の良き伝統とそれを慕って入学してきた生徒たちのことを思って本当に苦悩しているのは中村久美子先生ら数人の教員にすぎなかった。大部分が案じているのは己れの首がつながるかどうかである。今や校長以上に影響力を持つに至った権藤先生の自宅の電話は、歓心を買おうとする教師たちの懇願で鳴り止まなくなっている。

そんな時、彼は懐柔とも恫喝ともとれる一席をぶつのであった。

「先生のことは私も気に掛けていたんですよ。あなたが今までの星饒の教育方針に不満を抱いていなさったことは重々承知しているつもりです。私のように流れに逆らって生きるのは大変ですからなあ。な一に、心配はご

無用。これからは先生にぴったりの教育理念が星饒においても展開されるんじゃないですか。大手を振って来春の授業を任せられると思いますよ。及ばずながらこの権藤、河徳学園にも知人がおりますから、それとなく頼んでおきましょう。ま、連絡はこまめに入れておいてください。くれぐれも烏合の衆の扇動に惑わされずに、お願いしますよ——」

こうして支持者が雪ダルマ式に増えていく権藤派に対し、リベラル派は櫛の刃が欠けるように同志が消えていく。鈴木俊雄先生のマンションに集まったグループを数えるのに片手さえ必要なかった。

「今となっては理事長交替そのものを糾弾することは出来ないでしょうな」

鈴木先生は無念そうに腕を組んだ。さして広いとは言えないリビングだったが趣味の良い家具や調度が置かれている。そのソファに坐った彼はロマンズグレーの中年紳士である。

「何といっても我々教師は所詮サラリーマン。トップの人事に口を挟む権利はない」

「それにしても」と、冴えた美貌に影をつくって俯いていた中村久美子先生が言った。

「よりによって河徳学園の人間を連れてこなくてもいいはずなのに。ご存じですか？ あそこでは家庭に入らず社会に出て働いている女性を不良婦女子と呼んで、蔑

視する教育をしているのですよ。子だくさんが女の勲章だなんて、今時男子校だからって赦されるものではありませんわ」

語気を強める久美子の美しい眦が上がっている。今日の久美子は黄色のTシャツにジーンズのリラックスした服装をしている。日頃の白衣姿を見慣れた他の先生たちは、何だか眩しそうに彼女を見やるのだった。

「いくら経営陣が変わったからといって、時代錯誤の教育理念を星饒に持ちこむのは断じて阻止しなければなりませんぞ」

鈴木は沈みがちになるムードを盛り上げようと気色ばむが、やはり引かれ者の小唄の感が強い。そうは言っても、と、どうしても気弱な発言が出てきてしまう。

「新学期まで我々の首がつながっていなければ闘争も何もあったものではない……」

権藤の言動、振る舞いからしてリベラル派の久美子たちが厄介者であることは疑うべきもない。彼が河徳学園をダミーにした忠金屋グループ乗っ取り計画の先兵であるのはもう異論のないところだが、彼からこの計画の中樞へ流れた情報が春の校内人事に影響するのも必至と見られている。

「私は真っ先にバージされそうですわ」

久美子は自嘲気味に言った。彫りの深い貌が冷たい光沢を輝かせていた。彼女は無礼な理由を付けて保健室に

押し入ってき、竹刀をブンブン振り回していた榎藤の姿を思い出す。今から思えばあの頃はすでにこんな筋書きが進行していたのかもしれない。結局、榎藤の体罰事件に関する尻尾を捕まえることは出来なかった。久美子なりに手を尽くしては見たものの警察のような真似は素人には無理な話。榎藤派の学年主任、山崎先生の露骨な介入も理由のひとつではある。抗議をしようにも、若さをたしなめられ逆に二時間余り説教される始末だ。乗っ取りされる前からそういう調子なのだから、新しいスタッフが乗りこんできた暁には久美子の居心地はさらに悪いものになるだろう。最悪の場合、解雇も予想される。

「あーあ、そろそろデューダ先をあたっておきますか」

誰かの長嘆息に鈴木が厳しい視線を投げ掛けた。

「我々がしっかりしないでどうするんだい？ 教師の身すぎ世すぎなんかどうだっていい。子供たちの教育環境の保持を最優先に考えねば駄目だ。暴力で生徒たちを管理しようとする体制など絶対認めてはいけないことなんだよ」

いつも温和な鈴木の高い語調に座はシーンと静まりかえる。鈴木も言いすぎたと思ったのか、まずそうにビールの入ったコップを傾けた。暗い雰囲気は長引いたが、久美子がふと思立って初老教師に尋ねた。

「奥様はどうしたんですか。今日は見えないようです

けど」

鈴木は娘のような妻には目がなく、彼女の話をする人  
人の良さそうな顔をますます崩して乗ってくるのだ。久  
美子は鈴木が可愛らしくもあり大好きなのだった。

「うん、ちょっとね。最近、パートに出ているもんで  
ね。よろしくと言っていたよ」

鈴木はビールに赫らんだ頬を引きつらせてやや寂しげ  
に微笑んだ。それは初耳だったが浮かない鈴木表情に  
久美子もそれ以上は聞き辛い。ある会計事務所の経理助  
手として週に三度、家を空けているはずの妻に思いを馳  
せながら鈴木は切々と説きはじめるのである。

「そりゃあ、教師の生活も重要さ。君たちも知っての  
通り私の妻はまだ若い。ここで私が路頭に迷ったら大変  
なことになるのはわかっている。しかし考えて見たま  
え。十代の三年間は本来何物にも代えがたい宝石のよう  
な一日一日のはずだろう。それを守ってやれない教師だ  
ったら、そもそも必要のない教師だったと諦めたほうが  
いいんだ。そうだろ。給料袋で頬を叩かれて、信念を曲  
げる教師たちに囲まれた生徒が我々の前にいるとした  
ら、そこから逃げだしてはやっぱりいけないんだよ。微  
力なのはわかってる。可能性が薄いのも承知のうえだ。  
そういう努力をしている教師の姿を生徒たちの眼に焼き  
付けておくのは、少しも無駄なことではないと思うんだ  
が、どうだろう？」

追い詰められた集団のあてのない熱狂と昂揚は、時に悲劇的な結末を迎えることがある。圧力をかけられたゴム球が硬ければ硬いほど破裂した時は木っ端微塵と化するものだ。星饒学園の良識派の教師たちにもそうした危うさが漂ってしまいか。たしかなのは忠金屋グループ、そして雁金誠一の実力は一握りの教師たちのかなうものではないという現実である。

鈴木家での集会から三日後のこと、星饒女子学園の全教職員は学校に召集された。そこで新理事長、河徳 昂の言わば施政方針演説が行なわれるのである。河徳 昂は弱冠三十五歳。河徳学園理事長、河徳大助の長男だ。アメリカの大学を卒業したほどの俊才の上、スポーツマンらしいがっしりとした体型と浅黒い精悍な顔つきを持った、どちらかといえば青年実業家タイプの男である。乗っ取り屋とはまったくイメージが違うが、これに騙されるとひどい目に遇うわけだ。

はからずも河徳新理事長の挨拶は中村先生たちを震撼させる内容だった。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。

#####



## 美人記者失踪

ユキもまだ録音テープのすべてを聴いているわけではない。

「男が電話越しにテープを回したんですが、かなり明瞭に内容を把握することができますね。登場人物は四人。雁金誠一に右腕の佐伯弁護士。それと教育長の白石、文教委員会委員長の網代辰郎……」

「網代委員長——」

早苗は網代のいかにも地方議会のボスといった風貌を思い出す。

長老派の重鎮で総選挙への出馬を模索した経験もある実力者だ。早苗が文教委員会への所属を希望した時、院内交渉団体を形成しない無党派の人間が来ても意味がないなどと難癖を付けて入会を阻止しようとしたこともある。以来、事あるごとに衝突している犬猿の仲。彼なら雁金誠一と関係があっても不思議ではなかった。

「こういった席に雁金自から出向くことはめったにないので、盗聴してやろうと思いついたらしいですわ」

内容は実名こそ出なかったものの市内のある▲▲の乗っ取りの件らしい。

「まさか、星饒女子学園では？」はっとして尋ねる早苗。

「さあ、それは——」

わからない、とユキは首を振った。やはり直接会ってテープを入手しなければどうしようもないだろう。

「もちろんその通りね」女議員は気色ばんだ自分に苦笑する。

「星饒女子学園がどうかしたんですか。何かキナ臭い噂でも？」

早苗の表情が暗くなる。中村久美子教諭から忠金屋グループによる星饒の強引な経営権奪取の話聞いて、協力すると胸を叩いたのはいいが、議会の仕事の一つの山を迎えたこともあり、とてもそちらまで手が回らなかった。そのうち理事長の交替と忠金屋系の河徳学園からの新理事長の登用などがバタバタ進み、内心忸怩たるものを感じていたのである。娘のゆみが訴えていた暴力教師の件もあれっきりである。それを思うと胸が痛んだ。

「はあ、お嬢さんは星饒に通われていたんですか」話を聞いたユキは言った。

「可能性はあるかも知れませんね。もしそうだとするとお嬢さんの尊敬を一気に回復するチャンスかもしれない」

ユキは朗らかに笑った。笑うと鼻筋に小皺が出来るタイプだ。

その笑顔の人なつこさに早苗もつられるように微笑んだ。

「いずれにせよテープはなんとか手に入れたいわ。来

週初め、文教委員会が終了する前に是非」

これが終わってしまうと秋の定例議会までお預けになってしまう。緊急委員会を召集することも理論的には可能だが、裁量権は委員長である網代が握っているのだから無理である。

「それが……」ユキは悔しそうに唇を噛む。「関西へ行く所用があって雁金は来週一杯この街を離れているのです。側近である当の本人が付き合わなければ怪しまれるので、男と会うのはそれ以降ということに」

うーんと早苗は唸ってしまった。なんとも惜しいチャンスである。密会のテープが本物だとすれば業界、それもダーティな黒い業界と長老派の癒着ぶりを追及する絶好の証拠に違いない。教育委員会まで絡んでいるのが事実なら一気にこの市の教育界の澱みを一掃する機会でもあろう。星饒学園の窮地を大逆転する可能性だって秘めている。

「私が関西に飛びましようか？」ユキが提案した。

「そうね……だけどそれでも間に合わないかもしれない」

早苗はしばらく思案したのち、決断したようにユキに美貌を寄せ、何事か囁き始めた。

市議会文教委員会最終日は好本早苗議員の発言によって紛糾した。

好本議員は文教委員の一部がある業者に対し、不正な便宜を計らった疑いがあると、爆弾発言をしたのである。その真相究明にあたって委員会の会期を十五日間延長することを提案したのだ。十人の市議で構成されている委員会は、長老派がその内七人を占めているが、猛烈な怒号と野次が飛びかい、騒然となったのは言うまでもない。傍聴席の好本議員支持グループやマスコミの目を意識した網代辰郎委員長はすぐに休会を宣言した。得意の水面下の根回し、密室の議会運営に持ちこもうとする算段だ。

散会后、早苗は即刻委員長室へ呼び付けられた。

「好本君、たしかな話なんだろうね。君は選挙民の付託を受けた議員に対して犯罪者呼ばわりしているんだよ」

網代は両耳の上と後頭部に僅かに残る頭髪を撫でながら鋭い目付きで早苗を睨んだ。禿頭は油虫の甲羅のようにテカッている。

「市民の期待に答えるためにも、議員は衿を正さなくてはならないではありませんか」

「それはそうなんだが……」

網代は早苗の正論にたじろぐよりも、彼女の美貌に圧倒されるように口籠もってしまう。今日の早苗は黒髪を下ろしているので、グラマラスな色香がいっそう漂っている。春らしいパステルピンクのスーツの下に来たブラ

ウスの胸もとがいつもより大きく開いている感じだ。金鎖のチョーカーが光るそこは匂うような乳白色の柔肌がまばゆい。『豊満』の表現がぴったりの彼女のバストは、きっとあんな色の美しい肉の塊なのだろう。スカートから出た二肢の細さは素晴らしい。ストッキングに包まれた膝小僧を思う存分撫で撫で出来たらどんなに気持ちがいいか。スカートの中の太腿も逞しいばかりにムチムチしているに違いない。そしてその付け根の中央部には……。網代はつい女議員の肢体に見惚れ、あらぬ連想に我を忘れた。

「……し、しかし、好本君、委員会を延長するには、それ相応の証拠を見せてもらわんとね。委員長として前例のない事態を無条件で通すわけにはいかんよ」

「それは出来ないことですわ」

毅然として言い放つ早苗。ここが踏張りどころである。新聞記者の小沢ユキが関西で密告者とコンタクトを取り、テープを持って帰ってくるのは三日後である。それまではなんとか時間稼ぎをしなければならない。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

## 煉獄

小沢ユキは意識を取り戻しても、自分がどこにいるか、しばらくは判然としなかった。いや、なぜか鼠色のジャージの上下に着替えさせられ、鉄格子張りの監獄めいた檻の中に放りこまれているのだ、と気が付いても、ここがどこかなど推理する証拠は辺りには何も見当らない。窓一つないコンクリートに囲まれた部屋。その三分の一の所から鉄格子で区切られている。鉄格子の向う側の部分には椅子が三つと机だけ。正面のドアには覗き窓らしきものがついていた。

女記者は頸をゆっくりと回した。ホテルの一室で暴漢に襲われ、拉致されたのを思い出した。まだ下腹や首筋が痛んでいる。拳で肩を叩き、少しでも打撲をほぐそうとする。意識を失うほどの衝撃だったにしては軽傷なのかもしれない。深い痛手にならないように目的の効果を相手に与える技はやはりプロの仕業なのかもしれないと思った。新聞記者を誘拐するなど尋常な組織ではあるまい。するとどうしても考えられるのは一つ、雁金誠一だ。彼ならやりかねないし、力まかせに事件を闇から闇へ葬り去れるだろう。

寒々とした牢獄の隅に何か置かれているのを見つけた。汚いボロ布が上にかぶさっている。それを恐る恐る取り去ると、驚いたことにおまると尿器ではないか。ご

丁寧に尿瓶は口の広がった女性用の物である。コケ脅しにしては手がこんでいる。短時間の拘束では済みそうにない情勢だった。

はっと気が付いてジャージの中を調べた。大丈夫。下着は元のままだ。しかし服やズボンを着替えさせられたわけだから、当然半裸の姿を晒したことになる。カーッと頭に血が昇った。うぶな年齢ではなかったが、ユキは今、生理中なのだった。

十分くらい経っただろうか。ようやくコツコツと足音が聴こえてきた。一人ではなく複数の足音。身構えるユキ。といっても立ち上がって腕を組むだけだ。それでも眼を吊り上げて負けるものかとドアを睨み据える。何度となく事件の修羅場に立ち合った新聞記者だからこその度胸である。

覗き窓がガシャッと開けられ、獣のような視線がこちらを覗いている。錠前に鍵が差しこまれ、ロックが解除された。入ってきたのは三人の男たち。皆、屈強な若者である。雁金の私兵だろうか。ひときわ上背のある青年はまるでロボットのように感情のない瞳でユキを見下ろしている。

「あ、あなたたち……」さすがに緊張して声が擦れた。「いったい何者？　こんな馬鹿な真似はやめて、早く私をここから出しなさいっ」それでも気丈に抗議する。

「フフ——」笑ったのはノッポ以外の二人。

「新聞記者だけあって、言うことだけはいっちょまえじゃねえか」

「違いますよ。生理中なんでヒステリーを起こしているだけですよ」

男たちはユキの股間と貌を交互に見やりながら嘲笑する。

恥ずかしい事実を指摘されてユキは思わず貌を赤らめる。冷静になって考えてみれば、ちっとも気後れするものではないのに、それが女の哀しさか、つい男の眼をまともに見られない。彼らの卑劣な辱めだけでなく、自分の弱さにも腹が立った。ユキは火照った美貌をキッと上げて言うのである。

「あなたたちのような下っ端では話にならないわっ。上の人、首謀者に会わせなさい。わかってるわよ。雁金誠一でしょう。あなたたちの親分は」

女に下っ端と罵られて今度は男たちの頭に血が昇った。てめえ、いい気になりやがって、とか、生意気言うとただじゃおかねえぞ、などと口々に汚い言葉を発しながら鉄格子に走り寄ろうとする。しかしまったく冷静なノッポは二人の襟首を掴むように乱暴に制した。

「い、入来さん、だって……」子供のように不満の声を上げる二人。

「お前らの役目は容疑者を先生の所に連行することだ



ろうが。女の挑発に乗せられるようじゃまだまだ甘いぞ」入来と呼ばれた男は二人を突き飛ばした。

二人は舌打ちしながら鉄格子の扉を開けにかかる。ユキを睨む眼は面目を潰された恨みに満ちていた。ユキはそれを黙殺し、入来へ視線を飛ばす。

「あなたはただの不良じゃないようね。今、私のことを容疑者と言ったようだけど、どういうこと？ 何の容疑でここに連れてこられたのかしら。さっぱりわからないわ。教えて頂戴」

「グダグダ御託を並べてないで出てくるんだ！」

鉄格子を開けて入ってきた男がユキの腕を掴んだ。

「痛いわねえ。乱暴しなくとも行くわよっ」

ユキは毒突きながら腰を屈めて檻を出る。

「手を出しな。行儀を仕こんでやる」

男は懐から銀色に光る手錠を取り出した。ユキはそれにチラッと眼をやってフンと鼻で嗤った。しかし反抗はせず、黙って両手を揃えて差し出す。手首に金属の冷たい感触ががちりと食いこんだ。

もう一人の男が用意したのは長いロープである。それを彼女の腰に巻き付ける。二重三重とウエストを締め、かなりきつい。

「……お遊びにしては随分と念が入ってるわね。これも雁金大先生のご趣味？」

ユキは薄ら笑いを口元に浮かべた。

「さ、とつとと歩かねえか！」

ロープを結び終え、縄尻を背後で取った男がユキの肩をド突いた。

「待て！」地を這うような、腹の底に響くような入来  
の声である。

ユキも二人の男もビクッと足を止める。ユキの正面に  
立ちただかった入来の形相は陰悪なものになっている。  
眉間から額にかけて蒼い虹がかかり、硬質の頬がぴりぴ  
りと震えていた。

いきなり——入来のグローブのような平手がユキの頬  
に炸裂した。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。  
#####

小沢ユキ、絶叫

この、雁金誠一の私邸は皮剥けばエレクトロニクス  
を張り巡らしたセキュリティが完備されていて、外に対  
しては一種の要塞、内側に閉じこめられた者にとっては  
刑務所といってもいいくらいの嚴重さである。それは、  
名君は名城に住まう、などと戦国武将を気取った雁金の

変執的なトーチカ願望の結実といえる。素っ裸の女が誰の助けも借りずに逃亡するなど所詮不可能だった。

裸女との追っ掛けっこ——突発的な余興は、だからあつという間に結末を迎えたのである。女記者は数分も経たないうちに庭の竹林の中に仕掛けられたカスミ網に掬われて、海老のように二つ折りになった裸体を宙吊りにされてしまった。周りを取り囲んだ男たちに向って興奮した悪罵を叫び続ける小沢ユキ。だが編目からはみ出した白い尻肉をつつかれてもどうすることも出来ないのだ。口惜しくも狩られた狸のようにそのまま地面を引きずられ、再び煉獄へと連れ戻される——。

戦争中はよくこんな光景に出くわしたものだ、と、雁金は庭の各所に備え付けられた隠しカメラが送ってくる追跡劇の映像を警備室のモニターで眺めながら回想する。中国大陸に進出した若き政商の雁金は、関東軍と気脈を通じ、物資横流しの見返りに坑日分子狩りを手伝ったりもしていた。女スパイだった中国の貴婦人を馬に乗って追っ掛けまわした時の妖しい昂奮は今でも忘れない。そこまではいかないまでも、久しぶりに面白い捕り物であった。捕まった女がどうなるか、子供にだって自明の理であろう。

胡坐縛りに括られて、雁金の寝室に運ばれた女記者を、彼は秘密の小部屋から覗き穴を通して視ている。女体は所々泥にまみれている。あえて風呂に入れなかった

のはその方がかえって野趣をそそると思われたからだ。気性の荒いユキにはぴったりの図柄である。二つの枕を並べる一つの寝具の上に置かれた女。高手小手に緊縛されて、すらりとした二肢を胡坐に組まされてその脚首をきっちり縛られている。そこで余った縄尻を頸の部分の縄に結わえられているので、背筋が惨めに曲っていた。窮屈な体勢を必死に揺すってなんとか戒めを解こうとまだ足搔きをやめないところがいとおいしい。

が、表情は怯えた感じより気高さが滲んだ美しい貌だ。雁金の目はとりわけ彼女の鼻に吸い寄せられていた。懲らしめがいのある、生意気な鼻……。サディズムがフツフツと煮えたぎってきた。鼻責めをこよなく愛好する彼には理想的な女である。鼻責めは気の強い、誇り高い女であればあるほど効果もあるし、面白い。鼻鉤を挿入されて大きく鼻孔を広げさせられた時の女スパイの苦悶を眺めるのは最高の喜びであったし、現代ではさしずめキャリアウーマンがその代役を兼ねるわけである。とくに小沢ユキのような雁金に対して歯向かってきた女は格別の獲物だ。そういった意味で言えば、最上の獲物とはユキの背後にいる市議会議員の好本早苗かもしれない。政財界の黒幕は彼女の行状や美貌を思い起す。しかし早苗は公職にある身。手に入れるにはまだ時間がかかろう。

(……アカの好本早苗め。いずれ絡め取って鼻毛を抜

いてやる。待っておれよ)

淫蕩な想像をしていると、雁金は女を責めたくてうずうずしてきた。ユキを射る瞳に紫色の炎が浮かんでいる。

寢室の襖を開けると、屈辱的な姿勢の女の身体にさっと緊張が走った。頸を精一杯振り向かせて侵入者が雁金誠一と知ると、黒い眉を吊り上げて険しい形相になる。その頬に激しい立ち回りの名残の泥が付着している。

「どうした。まだ気が立っているのか。いい加減に観念したらどうだ」

雁金は彼女の傍らに腰を下ろした。

「運動会をして疲れただろう。今日は明日の朝までかかって慰労してやるぞ」

「変態っ」と、ユキはほざき、いきなり老人の顔にめがけて唾を吐きかけた。

「こんなことをして、何が面白いの！」

思いの丈をぶつけると、急に堰が切れたように彼女の両眼からはらはらと涙がこぼれ落ちた。メソメソした感じではなく、感情が昂ぶって噴出した激情の表れに近い。全身に鳥肌が立っている。ドス黒い荒縄に上下を挟まれ、絞り出された乳ぶさの静脈が青青として哀しい。

「まったく尖った女だ。少しその頑なな心をほぐしてやろう」

顔までは飛ばず着物の胸にかかったユキの唾を拭おうともしない雁金は、おもむろに片手を彼女の額に、もう片方の手を脚首を束ねている縄へかけた。さも不快そうに貌をしかめ、無駄と知りつつも身体を揺すって抵抗しようとするユキを、雁金はひょいと力を入れて仰向けに転がした。

「あっ……」胡坐の体勢のまま引っ繰り返される、経験したことのない恥辱に、泥に汚れ切って真っ黒くなっている足指を反り返したり、内に曲げたりして苦悶する。

「オ×××まで汚れているではないか。ただでさえ生温くて潤んでいてモジャモジャ毛が生えて、不潔な場所なんだから、このままでは虫が湧いて繁殖してしまう。清潔に拭いてやろう」

雁金は唇を噛みしめている紅潮した彼女の表情と寒気だっているような恥肉を交互に覗きこんだ。数センチ端を出しているタンポンの紐を指で弾く。

「こんなものをブラブラさせて逃げおうせると思っていたか」

雁金はゆっくりと抜きにかかる。あまりの卑劣な行為に、呻きを洩らすのも悔しいのか、ユキは貌を横に伏せて生唾を飲みこんでいる。陰唇がわずかにめくられて棒状の本体が頭を覗かした。ぷーんと性臭が漂い、チョコレート色に濁った全貌が露出する。完全に抜き取るとそれ

を戦利品のように彼女の貌へ持っていく。

「いくら軽い方だと突っ張ってみても、汚れるものは汚れるわけだ」

笑い者にされてユキは完全に頭に血が昇っている。

「最近男に抱かれののは、いつだ、ん？」

魔法瓶からたらいに熱湯を入れ、タオルを浸しながらチクチクと尋ねる。

「この色付きだと相当頻繁にまぐわっているだろう。ま、お前のように血の気の多い女はストレスも溜まって、激しいのを定期的にやらかさないことには悶々として夜も眠られなくなる。英傑、色を好むというのは男だけの話じゃないからな」

湯気がムンムンと立ち昇るタオルを絞り、二つに折って形を整えると、さっと陰部へ覆いかぶせた。

「あうッ」

美容院の蒸しタオルよりも遥かに高い熱に、敏感な女の急所が竦み上がった。

「あ、熱い……」あごを突き出し、小鼻をヒクヒクさせている。

「冷えた饅頭も、もう一度むらしてふかせば食えるようになるのだ。我慢せい」

双臀をピシャリと平手打ちする雁金。変態、鬼、人でなし、馬鹿、ユキの口から次々に出てくる罵りも、悪魔にとっては心地よい囁りでしかない。

「新聞記者と言えば物書きのはしくれだろう。もっとまじな言葉は出てこんのか。それではその辺の茂みに連れこまれて強姦されるOLや女子大生と、たいした違いはなかるうが」

ようやく雁金はタオルを手にして清拭を開始する。まず丹念に陰毛を擦り上げる。毛深いのでしがいがある。黒く艶があり、縮れが少ない。埃っぽい逆三角形はみるみるうちに黒髪の如く濡れ羽色の輝きを取り戻した。次にこんもりと盛り上がる毛饅頭。

「いい加減にしなさいっ」

女の抗議を戒めるように、タオルを中に挟み入れる執念深さを見舞ってやる。生理中でデリケートに神経が昂ぶっている腔肉にとって、この温度は応える。案の定、女記者は鼻を鳴らして貌を真っ赤にしている。むろんクリトリスや尿道は集中攻撃だ。その手の趣味がなくても、一度は糸で吊ってみたいくらい、見事に肥大した肉芯はタオルに揉まれ、ズルッと包皮が剥けた。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。  
#####

ママ、崖っ淵



好本ゆみは心配でならない。

最近の母親の落ちこみようはただ事ではないと思う。議員の仕事がうまくいっていないのか、傍目でもはっきりとやつれた表情になっている。それを隠すように出掛ける時はいつもより厚化粧をするくらいだ。何より娘として辛いのはゆみの前では決して弱音を吐こうとせず、良き母親たらんと、必死に振る舞おうとしている彼女の姿である。

だからゆみも気を使い、なるべく見てみぬ振りをしようと思うのだが、冗談に紛れて言葉をかけたときもある。すると母親は不自然なくらいに狼狽し、エキセントリックになって娘の心配を否定するのだ。

『ゆみちゃんはそのことに気をかけず、しっかり勉強して精一杯▲▲生活をエンジョイすればいいの。ママはいつだってヤル気まんまんなんだから』

そう言って笑う母親の貌は、しかしやはりどこか元気がなく寂しい。あの、華やかなカツと燃え立つような美貌ではなくなっている。

心配はそれだけではなかった。一日数本程度だった嫌がらせ電話が、このところ急増しているのである。あまりに頻繁なため正常に回線を使用できず、とうとうそれまでの番号の電話を早苗の寝室に持ちこみ、新しい回線をリビングに入れたくらいだ。ゆみにすれば古い電話番

号など捨ててしまえばいいと思うのだが、脅迫に屈したことになるのは、進歩派市議としてのプライドが赦さないらしい。が、その種の電話に以前のようにやれやれといった感じで苦笑混じりに対応していた様子とは違う雰囲気、寝室のドア越しに伝わってくるのも事実である。どこか電話の主の御されているような、へつらっているような母親の態度を、通りかかったゆみが気付いたのは一度や二度ではなかった。

（しっかりしてよ、ママ……）

あまりに大人の領域のような気がして、母親にその件を尋ねるのは逡巡しているが、心の中では常に声援を送っている。

「あ、ゆみちゃん、出掛けるの？」

珍しく朝から家にいる母親が尋ねた。ゆみはポロシャツにキャロットの、春らしい服装である。十歳歳の真っ白な素足が眩しい。

「デートなら適当に切り上げなさいよ」

母親の役目の苦言にゆみはふくれる。

「違いますよ。生徒会っ。来年度の学校行事の自主運営の生徒の役割について論じるのよ。ただでさえ理事長が代わって学校側の規制が強まりそうな気配なんだから。あの銀蠅が生活指導部長じゃお先真っ暗ってところだけど、今日は中村先生も来てくれるって言うし、正念場だわ」

「ゆみちゃん……」早苗は面目なさそうに貌を暗くする。「御免ね。ママが力になれなくて」

ゆみに頼まれ学校に乗りこんだのはいいものの、予想以上に乗っ取り一味の学園に対する侵食ぶりが進んでいて、突き崩すには至らなかったのだ。変態教師を追い出すどころか、要職に就任させることになってしまっては娘に会わせる貌もないのである。むろん、それどころではないほどの忙しさが議会の方であったわけだが、言い訳をしないところが早苗の性格を表している。

「いいのよ。ママ」

ゆみも重々承知なので母親を責めたりはしない。ゆみは母親の美しい白い頬に小さな吹出物がプチッと出来ているのに気付いた。きっと▲▲生の自分には思いもよらないようなストレスが母にはあるのだろう。

「やっぱり学校の事は生徒が先頭に立って行動しなければどうしようもないんだわ。ママは議会で市民のために思い切り働いてくれればいいのよ」

「そ、そうね——」

娘の眩しいような若い正義感に触れて、なぜかドキマギしている早苗。

「それじゃ、行ってきまーす」

茶目っ気たっぷりな星饒学園生徒会長としては少し照れたのか、駆けるように玄関へ向う。洗いざらしのスニーカーを履き、飛び出していこうとするゆみの背中へ、

母親が慌てて声をかけた。

「あ、ゆみちゃん。今夜、ママは遅くなると思うから一人で食事済ませてね。冷蔵庫の中に用意しておくわ。ひよっとしたら泊りになるかもしれないけど、夜更かししては駄目よ」

ハイと軽やかな小鳥のように返事をして玄関を出ていったゆみには、早苗の思い詰めた表情はわからない……。

鏡台に向い、きつめにファンデーションを塗る早苗の瞳はどこか虚ろである。スリップ姿の彼女——黒髪がかかる肩や二の腕、そしてあらわな胸もとは乳白色の輝く餅肌である。成熟とはこの女の肉体のためにある言葉ではないかと思われるほど、白い下着の中の豊満ぶりは見事である。今年、四十歳を迎えた熟女の胸は深い谷間が見えるほどに巨きく、パンティに包まれたヒップをでんと椅子に坐らせ、いつもはスカートに隠れて男たちの良からぬ妄想を掻き立てている太腿も、逞しいばかりに肉をのせていた。

早苗は化粧を施す手をふっと休め、深いため息をくれる。長い睫が震えながら閉じた。

……好本早苗議員はようするに賭けに負けたのである。

肝腎の小沢ユキが関西からの電話を最後にぷっつりと

音信を立っただけだからお手上げであった。期待していた灰色議員と忠金屋グループ総帥、雁金誠一との決定的な密会を盗聴した録音テープが手に入らなかったことは致命的なダメージを彼女に与えたのは言うまでもない。不正追及のためという名目で、早苗が強引に延長を主張した文教委員会は間の抜けたものとなった。彼女はやむをえず今まで自らが調査、入手した証拠を元に論陣を張ったが、新聞の記事だの雑誌の特集だのの丸写しであってまったく迫力を欠いたものであった。開会されて三十分も経過しないうちに長老派議員から激しい野次が飛びはじめ、いつもは早苗に好意的な政党の議員たちすら席を立ててこそこそ議場を抜け出す始末である。委員長席で踏ん返っている網代辰郎が時折、嘲笑しているのがなんとも口惜しかった。

##### この章の残りは有料本編でお読みください。  
#####

しゃぶられる熟女のおっぱい

ボリュームたっぷりの早苗の胸がこぼれ落ちると、男たちは口笛を吹いて囃子たてた。

乳ぶさと呼ぶより乳房（にゅうぼう）と呼んだ方が雰  
囲気のであるバストは、肌理の細かい肌を持ち、ホク口の  
一つも見当らない紡錘形の肉の房。さすがに乳頭部はピ  
ンク色と言うわけにはいかなかったが、大きくも小さく  
もない乳輪を冠し、陥没のない乳首は勃起状態でもない  
のに上を向いている。

「母のオッパイって感じだな」正面の男が笑い、無造  
作にガツンとわし掴んだ。

「うっ……」夫以外の、それも自分の政治的立場を否  
定する暴漢者に、双乳を手ごめにされる屈辱に早苗はカ  
ーッと血が昇っている様子。男の毛むくじゃらの両手の  
中で、揉まれ、拉がれ、捏ねられ、練り合わされて、こ  
とごとく変形する乳房は、すぐさま痛烈な腕力に指痕の  
赤斑を染みこませてゆく。網代の股間は暴発寸前であ  
る。市議会の赤薔薇と称えられ、明晰な頭脳と鋭い舌鋒  
とで、たびたび役人や与党サイドをたじろがせているマ  
ドンナ議員、好本早苗のチチが、思う存分嬲られている  
のだ。額に押された『天誅』の文字がなんとも刺激的で  
ある。

「あなたたちはただの痴漢よっ。天誅が訊いて呆れる  
わ！」

三白眼を光らせ、屈服するものかとほざき立てる早  
苗。しかしその鉄火の報いに、乳首をいやというほど摘  
まれ、潰される。

「乳が垂れてきそうなデカパイしやがって、へらず口叩くんじゃない、この牝牛が！」

耳の側でつんざく罵声を浴びせられて鼓膜がジーンと痺れてしまう。

背後の男の手がパンティにかかった。ここまでくれば予想の行為だろうに、早苗は身を藻掻かせて抵抗を試みる。乳ぶさがブルンブルンと揺さ振られ、苦渋の生汗が熟れた肉体を滴り落ちる。

「もう一度、殴られてえのかっ、好本オーツ！」

男が再び手を大きく振りかぶった。

さっきの衝撃が蘇り、早苗は身を竦ませる。それは脅しだけで、抵抗が怯んだ隙にお尻からパンティをズリ下げた。

「あっ、いやッ」

叫んでも後の祭り。四十女の肉感的な臀部がツルンと剥き上がる。バストがバストならヒップもヒップである。これだけ形良くパンチの効いたケツは日本人には珍しい。割れ目も深く、当然、尻梁は肉高い。

網代の転がされた位置からは折り曲げて揃えられた脚で陰部は拝めない。が、男たちに身体中を小突かれるたびに、早苗の二肢はくねり、時折、ヌッと垂れるようなxxxや白肌に植わった黒毛の鬚りなどがチラつき、昂奮はいよいよクライマックスである。

「よっしゃ。テーブルに括りつける」

大男が乱暴に和式テーブルの上の料理を青畳にぶちまける。高価な陶器の皿が音を立て、食べかけの海の幸が捲き散った。徳利が転がり、とくとくと美酒が流れでる。すっかり広くなったテーブルに激しく身を藻掻かせた女体が仰向かされた。屈強の男が三人がかりでは女の抵抗などはかない。

「いやァーッ……」大口を開けて悲鳴を上げる早苗だが、まず両腕を折り曲げられてテーブルの脚にそれぞれベルトで固定された。懸命にバタつかせた両脚も結局は割り裂かれ、脛の部分を幾重にも革ベルトが固定する。

「てこずらせやがって」三人はとうとう開かされた女体を満足そうに見下ろすのだ。

「随分と毛深いじゃねえか」

「あんよ、おっぴろげて、何もかも剥き出しだぜ、議員さんよ」

「ぱっくりオ×××が口を開けて、尻の穴まで丸見えだ」

口々に下劣な品評を加える男たちの言葉に、早苗は気丈にも貌を伏せはしないものの、瞼から一筋の涙をこぼしていた。

彼女が気づく由もないのは、這いずってきた網代が眼球を血走らせて股間を覗いている事実だった。正面に廻りこんでばっちりの角度を確保する。陰部はもとより、その向うのこんもりとした双つの頂きや、さらに奥の鼻



の穴まで見られた。

（これが好本議員の——！ 熟れる、いや爛れてやがる。こんな猿ボボをお跨に垂れ下げて俺たちを追及していたのかと思うと考えさせられるものがあるな）

ある種の感慨に耽りながら、網代は後悔せぬようにそれを脛に焼きつけるのだ。鬱蒼とした毛叢を湛えた下腹から肉厚のビラビラにかけての陰部特有のくすみ眼に染みる。真っ白な太腿や臀部からしだいにメラニン色素が煮詰まり、括れるように盛り上がった肉唇は性交の擦りに焼けて黒光りだ。痛恨の跨裂きにあっているためその部分はほつれ、豚肉色した襞が覗けている。ちょっと見にはグロテスクにも思えるが、重なりは密だし、クリトリスも大きく名器の予感がする。そのすぐ下にひそんでいる肛門も、中指でも挿入したくなるようなマニア好きする一物である。まさに腐りかけ寸前の女陰といえる。こういう生殖器こそが男にどれほどの悦楽を与えるか、この歳まで女遊びを続けてきた網代にはわかりすぎるほどわかっている。

（処女のおそこは昂奮はすれども性的な満足は得られんもんだ。本当に女とのまぐわいを楽しみたいなら大年増のネれた×××さ）

網代は猿轡の中で涎を啜りながら、噴辱に震えている早苗の太腿の筋を眺める。

「さ、時間がねえから早いとこやっちまうからな。ま

ずここを——」

ノッポが早苗の密茂を指差した。

剃り上げる、というのだ。

ケツの毛まで一本残らずに、などと猥褻な言葉で恫喝する。そして媚薬を膣内と乳頭に擦りこみ、極太のバイブレーターで潮を噴かせ、女の恥を思い知らせる。最後の仕上げは双つの乳首とクリトリスに特別なリングを装着すると宣言する。

男の言うリングは形状記憶合金で出来ていて、人肌に触れるとその体温に反応し径をずんずんと縮めていく現代科学の産物である。

「フフ、こいつを急所に通されれば、じわじわと根っこを締めつけられて気が狂うほどの痛みに見舞われるわけよ。最近の女のお転婆は目に余るからな。もってこいの懲らしめの道具じゃねえか、そう思うだろ、ん？」

男はいつのまにか取り出したシェイビングクリームをカラカラと振りながら早苗の貌を覗きこむ。早苗は男たちの悪辣な魂胆を聞かされ、憤怒と恐怖に眉を吊り上げている。何か叫べば哀願か、惨めな悲鳴になりそうで必死にこらえているようだ。

##### 以下は有料本編でお読みください。

#####